甲越互戰記考正

リ 5
3661

甲越五戰記考正 三

リ伊5 信
3661

信 伊ら り 3661

享和辛酉春鐫

出浦正左衛門輯

五戰記攷正

特健堂蔵版

奇文欣賞書樓

甲越五戰記攷正序

余少讀歷史尋古今成敗之蹟每聽越公之遺風餘烈未嘗不躍然而喜慨然而歎焉其所以喜之者公之用武於川中島目中已無甲談笑拉十萬之衆甲人不敢再飲馬於犀川其英邁豈非可喜哉其所以

阿波國文庫
不忍文庫

歎之者、衒術貪祿之徒、巧其言没其實而作之書、以貴已流、況如甲陽軍鑑、嫁名於高坂氏、川中島之五戰皆與贏於甲、其誣英雄欺後世者、不尠矣、其寃埋豈非可嘆哉、夫戎馬驍騘之間所貴者非才也氣也、斯氣也能讀書萬卷而善然也、

古有嵓棲洞巣之士、而抱輔世長民之手段者、一時應帝王之聘顧、出佐天子、號令賞罰討施諸明堂、一法每出、為天下萬世之憲典、而其人平日所讀者果何書乎、未有書之可讀、則圯上一篇足為王者師、然則讀書萬卷、倉卒之間不得使斯

氣何貴多哉是以天生斯人則亦假斯氣而千古或一人而已

皇朝應仁之末足利氏失其政羣雄輩出魁士蜂簇而天以斯氣獨與越公一人而已矣越公少長螢窓間讀書餘暇而西越歛國入於京師東渉八州謁於鎌倉十萬馬蹄蹴北條氏之城池一介義言挫織田氏之頭角而其區畫排置出於時輩羣雄之上則是非善使斯氣者耶嗚呼越公之英氣偉績實足為百世用兵之鑑矣曰令家臣出浦清命錄公之用武之本事始末幷余先君羽林公之軍事

始於戸石之役、終於川中嶋五戰、名曰甲越五戰考正、合爲五卷、即命剞劂氏、公之於世、而諸書所載、弃舛謬妄之説、悉皆芟刪、其立論引証、按之地圖、照之家譜、以質其謬、庶幾後世與余同志者、曰此書以談古今成敗得失之蹟、而見越公之遺風餘烈、則亦不爲無小補也、然則清命之有功斯書、非可小視者也云爾、

寛政庚申之冬仲

更級少将村上左衛門佐八世孫

源義處謹識於荏土駿臺之寓居

亀山織太素書

信夫恕軒翁記念　大正三年四月　信夫淳平氏寄贈

甲越五戦考正　目次

巻の一

總論

巻の二

武田信玄公兵を率して信州小県の戸石の城を
圍む村上羽林是を出しく是を援ふ
信玄と戦ひ大よそ軍を敗る
武田信玄戸石の城を抜て兵を常田に移す村
上羽林これを怒て兵を出して再ひ信玄と戦ふ
村上羽林大軍を出して武田信玄と上田原に戦ふ

越軍春日山を没して足利が居城に入て足
を保ち羽林自ら小戦を通ぎて長尾道信の師をとゞむ

巻の三

長尾道信村上羽林の為に小笠原を帥して信州
小県の羽林もまた兵を出して武田信玄と甲の
家に戦ひ大に其軍を破る

巻の四

長尾道信村上羽林の為に信玄を出して武田信
玄と川中島に戦ひ大に其軍を破る
長尾道信村上羽林和信の為に兵を帥して陣営を
戸神山に没落す武田信玄と川中島に戦ふ
長尾道信村上羽林相模の為に兵を出して武田信玄
と川中島に戦ふ

巻の五

上杉道信上洛して将軍家に謁し准后殿
を偏る
上杉道信兵を帥して関東の所々に戦ひ且和田
義を誅る
武田信玄兵を率して川中島より村上家の遺
将を放火し長沼の城を攻む

上杉謙信公を帥して関東の諸城を抜く

上杉謙信大軍を率して小田原氏康が居城小田原をかこむ

武田信玄公を率し来て海津の城に入是に屯陣

信濃の村上家の舊士等を害ハ

上杉謙信村上羽林父子お従ふ大軍を引し陣営を妻女山に設け武田信玄ハ川中島に戦ふ

足利大樹書を上杉謙信に贈ふ

上杉謙信村上羽林父子公を率して武田信玄と川中島におひて挑て編りて未ぞ公をたさむ

附言

一 一の巻ハ甲陽の記の歴代に観歎けるを正し又ハ或ハ浮虚妄論多く市俗の文鄙因て之を刪り且ツ是非を分して以て諸人の惑を解かんことを欲ス

一 二の巻ハより之ハ長尾が舊君村上羽林氏上田原合戦の後ハ小越の謙信に援を乞ふより是を皆先人兵家不の遺書傳説に據りて或ハ古今代の識記の戦記に符合して云ふとも古今端より為りての方角を定して是非を闘説す

今を悉く地理を正し務めて私意を交へん其
まゝも取捨又の不毅なるは深ましき事もあり
あらば文部さらに顛りして将来の君子を
俟つといふ

寛政十一年己未仲冬　信陽阪城隠士　出浦源清命記

甲越五戦記考正巻之一　出浦源清命輯

総論

今来古往俯して観仰して察るに興廃存亡それ
いづれか川中島合戦の濫觴を為ず一朝一夕の故に
あらず其の起り既に久し甲陽の武田信玄属隣国を
侵しひいて信濃に及び小笠原諏方の不肖を掠奪し
すでに村上家を滅しその封疆を掌握せんとを欲
して兵刃を接するに止時なし謙信はしめて天文の末に及で
益々争ひてその志を継ぎその記録今に遺ぶ
て世よりうけといへどもその説粗録する所あり予

是を居歎なるを先人の慈る所の遺書傳説に
よつて其の是非を判ち表し誤まる所の備妄を弁じ
因て先甲陽軍鑑の説を挙て其の違へるを正す
其の記に曰天文十五年三月のころなるに甲陽の大軍信
州より海野の辺を放火して戸石の城をかこむ
城主ハ名高き大ゐなるをもつて急ぎさしもの士にしと又須那出
村上義清に注これを清伊宗一万余を率して
戸石の城を攘ひ城主名これによ力をゆて忽ち城
つゝと宛甲陽の将軍に対戦し夷み将て急ぞの囲
中ずる甲陽の名将を破さ戦ずとも利なかりしして

大よ崩ちるのきつかれ先陣の将井利俊仲
を始として其の外寛若の勇士数多戦死し村上の
先陣頻りに入道等も様々に寄して競ひかかりて
甲陽の中軍にまはりこてをいて甲陽の大将晴
して御旗へさ御を失ひ士卒皆説をくしぞ
信玄が先鋒なる一番まの備ひも甲陽の後軍
山本道鬼後角共後ニまをとして其の名又百計よ
て家よ四将して村上勢を南面よ向ひし甲陽の
名是をそれて大いよ手をゆく打戦ひ村上勢終
小利ありれて後をハ信玄を氣不審し頻よ

下知して是を迎ひ首を獲ること一百五十余級村
上義清遂に没落し信玄大いによろこんでその
翌年天文十六年の八月まで大軍を発して
戸石の辺を放火し遂に上田原に入る村上義清大いに
に怒て兵八千余を率して信玄とおゝいに戦ひ
忽ち甲州の先陣を破る義清も亦こゝろ敵ハり
高田に縁戦すること凡十余合此時にいさゝく
甲州の諸隊大に崩れ没落し義清数に士卒をすゝ
め信玄に向て其まゝ攻をかけず甲州の兵是をとく
て信玄を助て義清と相戦ふ義清の兵士もおほく

五千騎計りを池が原にて援て是を迎て甲州の兵勢
にすれくしてそを獲ること五百ましてよ
おかく村上の軍兵遂に没落し義清も中すゞ越後に奔て
長尾景虎入道謙信に縁る所て義清謙信にいて
因幾くハ公の鉾を借り信玄が頭を斬て浮屠を雪
がんとを請ふ謙信それ日来信玄が為に所地を奪
はれし援兵をもて救ふ時にいつて出陣を辞する
は義士の為にする事に似ず是を承諾して
おかく謙信枚に義を結んで信州に出し海野平
に軍を出されて十五年の甲越の両家河

中嶋に対陣るとの報知に及べり然りとも要害にすぐ
よつて兵をうごかさゞりしに越後の列士等より合に及
のこらの後陣引揚年九月上旬須坂村上義清が後に
兵一万二千余を率して信濃に入り川中嶋を渡つて
西条山に陣営を設く武田信玄此よしを聞て兵二万
五千余を帥して信濃に入り海津の城を據て信
玄諸将に計策を授け兵一万余をもちて西条山
に向はしめみづからの兵八千余を率て河中嶋に
出張し謙信をよくはさまんとす同時に両の夜の後り
を越輝矢に備へて相當の時を待つ明れば九月

十日の朝に及んで越兵の先鋒八千余の軍勢かゝりの術を
用ひ甲陽の先陣を破る甲陽の兵志づく防ぎ戦ふ
といへどもふせぐことを得ずしてさしも勇の中軍武
田左馬介信繁討死す諸角豊後守原隼人の兵士振
錚々の戦死し謙信も信玄の左右に近寄て下の士振
の太刀打に馬甲陰の侍を失ひ既に危ふく荒木
して戦ふ英雄おしくも唐土の豫讓いよく嚴
重なりし此時にあたつて謙信しづかにとうし士卒
に先ち甲陽の本軍をやぶつて信玄と双をまじへ
謙信の太刀をふるうして竟にのがし終えども

信玄父を放逐とされし赤洞の軍を率ゐてうけつ流
しけば父のよくよけらひ志しこゝとさし戦ふ甲
府の武士かきしとえてもと投けて嫡子を拒まさへ
てこゝをあかく嫡子太よ恐嫌して競ひ戦ふし
いとも勇あると聞られてよと兎くし遂よ追く
甲府の家臣よ命してこゝを越て越後の家臣さ
戦ふし終ん人の大の露ましてさ摩川筑戸の二流よ偏
ま溺死するものん一千余人信玄家とよ士卒を励
まし追撃して首を獲るし一千でうりふくうり
たゆく越後の家遂よ敗亡ん嫡子につらし和田

義元一人を従へる桶狭間を越へてかのやうん織田の
が為越前よ足をとめて居城よいでちらくつ和田
義元を誅戮し其日の恥をたゞはらひかくさん
が為めなりしへ甲越の説妄海賊ハ銀惑するよ
及びよせてつくことを考ふるに甲陽軍鑑なる坂
源が自撰の説によれば人の偽作によるもの銀
なし其の中へいらんとまさで軍鑑中第一の失第二
の失はまた天文三年乙亥記之してかの二の失の中
に於て甲府が父の城になく滅亡せしなど
挑なり候するに久秀が滅亡ハ天正五年の事として

軍鑑に記せる譜代より纔二年のちなり甲陽の徒之をまりも邑を爭ふるはこれなりといへども是を考るに甲陽軍鑑は後人の偽作なるの疑あり又第九のよしは天文十六年二月十五日武田信玄諏訪と相具し八幡宮社家の家にある所の信玄願書に信玄自ら誌して周防の大守大内義隆は長門の国において滅亡其の路陶晴賢がために弑せらるといへりを按ずるに大内義隆の滅亡は天文二十年九月朔日のことにして甲陽軍鑑に云へる譜代に較べ五年の違ひあり予が旧著君村上羽林の戸石合戦も天文十五

年三月のことなり信玄上田原の戦も天文十六年八月なりといへども信濃より東へ出る途へ戸石上田原も同じ天文二十二年三月のことにして甲陽軍鑑にいへるよりのち七年のことなりまた此の説亦いづれも事実を記せるものなく伝写にはへる二世の間の一言をもつて人を惑はすするにも無信用すべからんやされどもとはいつて考へは彼甘いる坂濱云ふよりとまさる明らかなり且戸石の合戦に山本勘介法角が後ちに宿に従ふ兵百余を回将し戸石の後へまで村上勢を南面に向しむと伝へたるは撰者地理によくしこさが

まあり村上家の軍勢ハ始終人より勇ミ面
てはなり信玄が云戸石の城のうしろへ出る
しといふハ甚だ大なる謬説なり今地理ハ
考ふるに戸石の城のうしろへハ険絶にして人
の出ることハおもひもよらさる地なりけり且全く
軍鑑の撰者杜撰をもて己が云を飾りて
人を惑はしめんぬへしまさに甲陽軍鑑
合戦のおそれに云るところ腰塚板垣
駿河小山田備中守の鉾ね兵賀東路を
憐せしむ武ハ伊豆の豪士等を押へんがゐ

扨又ハ勇ひありしハ信玄が戸石の城攻ハ小勢にし
て甚さ合戦なりよしといへども世俗の不
認まけそもしいふものにして妄説も亦甚し
信玄合戦に飯富兵部板垣駿河小山田ハ当服る
乱れしして信玄が大将は甚く志べく憐ふぞ
戦ふことへしも利あらして遂に敗走しけるこ
とありまさに記す天文十九年 歴代鉅鉄のとはおふみとふう
信州戸石の合戦の時甘利備前守旅亡より
検使の横田備中も討死也 甲陽合戦記に甘利備前横田備中が従討死しぬ
まよその士卒ハ従者随卒まてのこらずの場と一寸も退かず
けりとぞ示す妄説なり信玄全集に悉皆記しその云…

ども一寸も退(しりぞ)かざりしかバ同十郎兵衛ハ無勢をもつて村
上家(け)先の兵を催し小嶋五郎左衛門を組ふせ源五
を討とりしかバ横田が徒同心もこれにきそひ
合せ数人をうち負死人(ておひしにん)も遂(つひ)に御旗本へ迫(せま)し合
せし戦ハ一入(ひとしほ)はげしく討(うた)れぬ此合戦ハ信玄
公の負なりと山本勘介も加藤駿河守もしるし人切を
続て諸角豊後小山田備中日向大和今井伊勢守の三
頭を始として退き討れ都合二百二十余人討れ敗(しば)い居
を踏(ふみ)へあハヾ戸石崩(くづれ)といふて此合戦ハ大きなる負(まけ)の根
なりとも傷を被り給ひしハ信玄の

勝利なりし云々 戸石崩といへるハ是を甲陽軍鑑に戸石崩とハいへども師に負しとなり
として思ふてハ哉さんや是よろしく ことごとき戸石の役ハ信玄大役なりと明らか 甲陽軍鑑
の虚妄なりしるかくのごとし 上天文十
七年より同十一年まで凡そ六年が間
小県の葛尾(かづらを)領信(りんしん)村上羽林(うりん)のかたよく在と信
玄出し信玄しば戦ふといへども哉せざる事(うつさ)よ
村上を撫(ぶ)するまで又十六年の後村上羽林
の軍(ぐん)破(やぶ)れて小県の領信を恃(たの)むのよしと
述(のぶ)る事へよつての云々符合(ふがう)させんがためい
ふ事不の推量(すいりやう)違ひの説なりしてる空説(くうぜつ)

僻文(ぎやくぶん)をなして老人(らうじん)らの役所なり今その
書物を世にもてはやしたるハいとも證拠(せうこ)なる
事なれバさるべしかくのごとし亦行玄が行
跡(せき)をあらはしおきたるハこれらかの非(ひ)を
我(の)世に知らす不徳(こう)なる事に似たれバ浮正が身
をしてよくも上を非謗(ひぼう)するハ不生行の心にや
もし浮正が他(つく)る不なるハいたれバいけるましき
ごとなりたるを以てその書の浮正より
いさがるるとこへしもるかハ行玄が行(きやう)
状(じやう)浮世(ふせい)の亀鑑(きかん)しやんがらきんあくるや是

又作(さく)にたるれ行玄の人とあるハ秀才(しうさい)
あるとなへしも義(ぎ)とせるのありてあるべし稗(はいし)
を学(まな)べし、いへどもおほひとゆくりへし
いへとも文作(ぶんさく)の虎(とら)を放(はな)ち己が志を遂(とげ)ずし
擬(ぎ)するに人の世を棄(うて)んことを欲(ほつ)し諂方(すい)
軌義(きげ)を害(がい)するのその不孝不義貪欲暴
逆(ぎやく)なるにしかそふるに順(じゆん)なし筆端(?)にする
すてにその非(ひ)をのぞかりかると泥(でい)や
他人(さ)にかかくおほひを非謗(ひぼう)せざらんや行
見るも彼(その)書を作するものも又おほいに口まし

然る人なければ文字が論する所を更に益
なし敵なきときは討するに及ばん惑ふを
のがれば兵するに及ばん今ゆゑしかるを
すてて其の枝梗とのへ窺ひ浮論をとく
ところ然りといへども其文字より論小の事
はなはだしく學問をせずして性顯然にして
萩麦と兵ざれば文辞の上にまして渇り
まつともなしうらん然れば其のときは
亦むかし遠く比ひかるん頭字没して八十余家に
して眼耳杏冥ふかのりへ統もます

労しぬきは同志の君子明弁せられん事
を庶幾する而已

追加

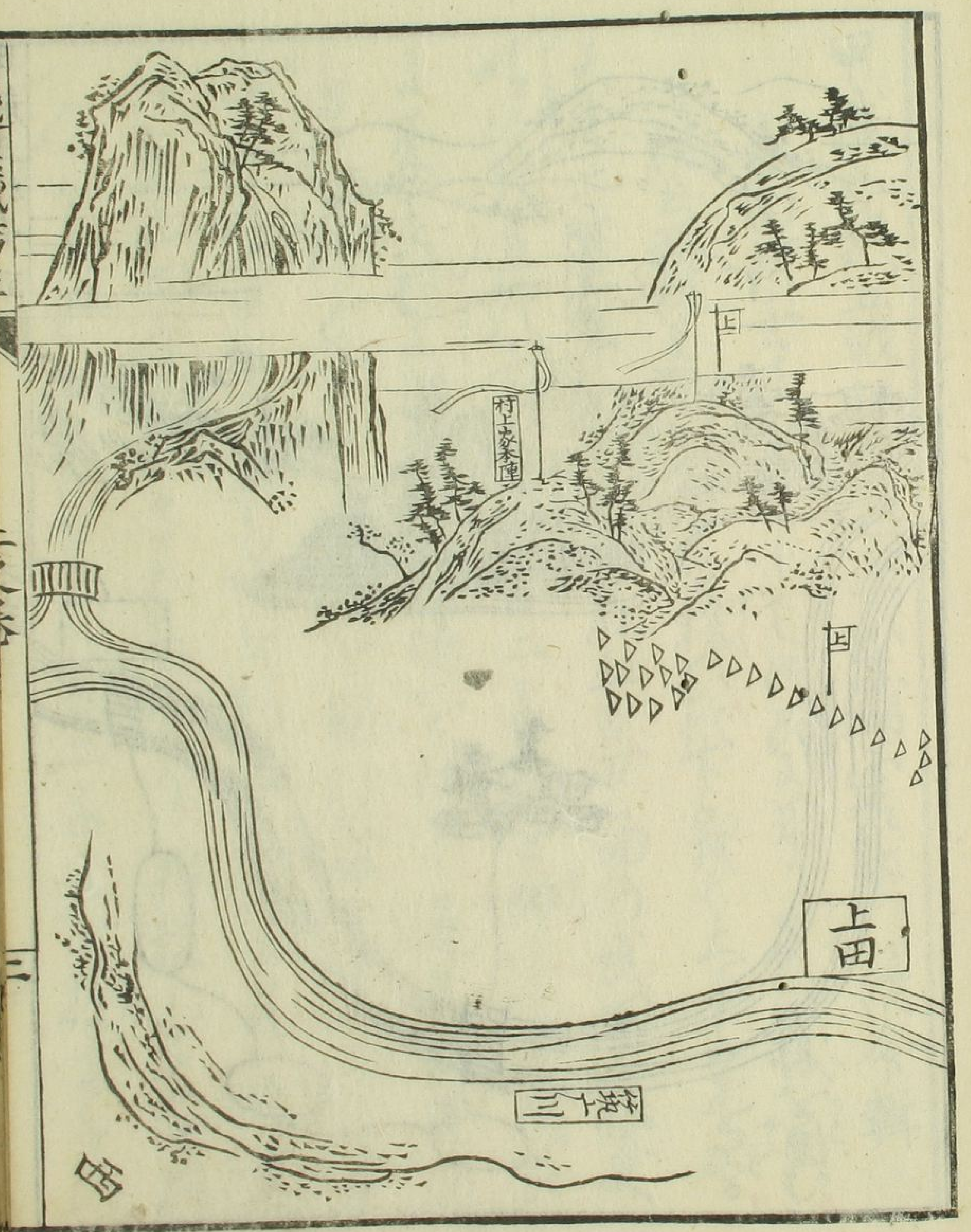
上田原より葛尾まで三里
葛尾より小縣春日山まで行程二十五里　川中島まで八里
芋川より春日山まで十二里余
村上羽林上田原の軍破れて芋川の城に
入る七十余日ありて後ち羽林自ら小縣
を過て長尾道俊に據る
川中島より春日山まで二十里

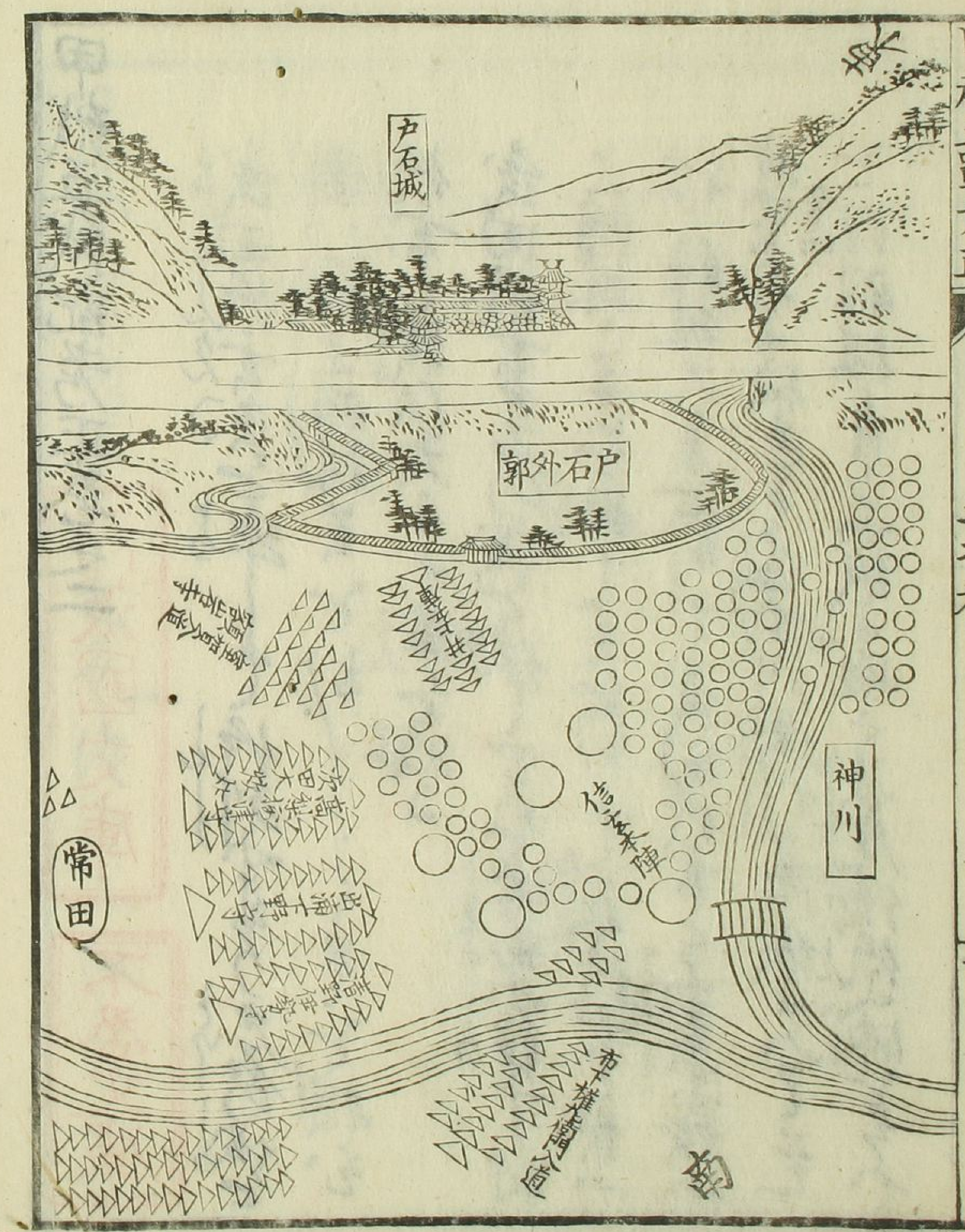
阿波國文庫

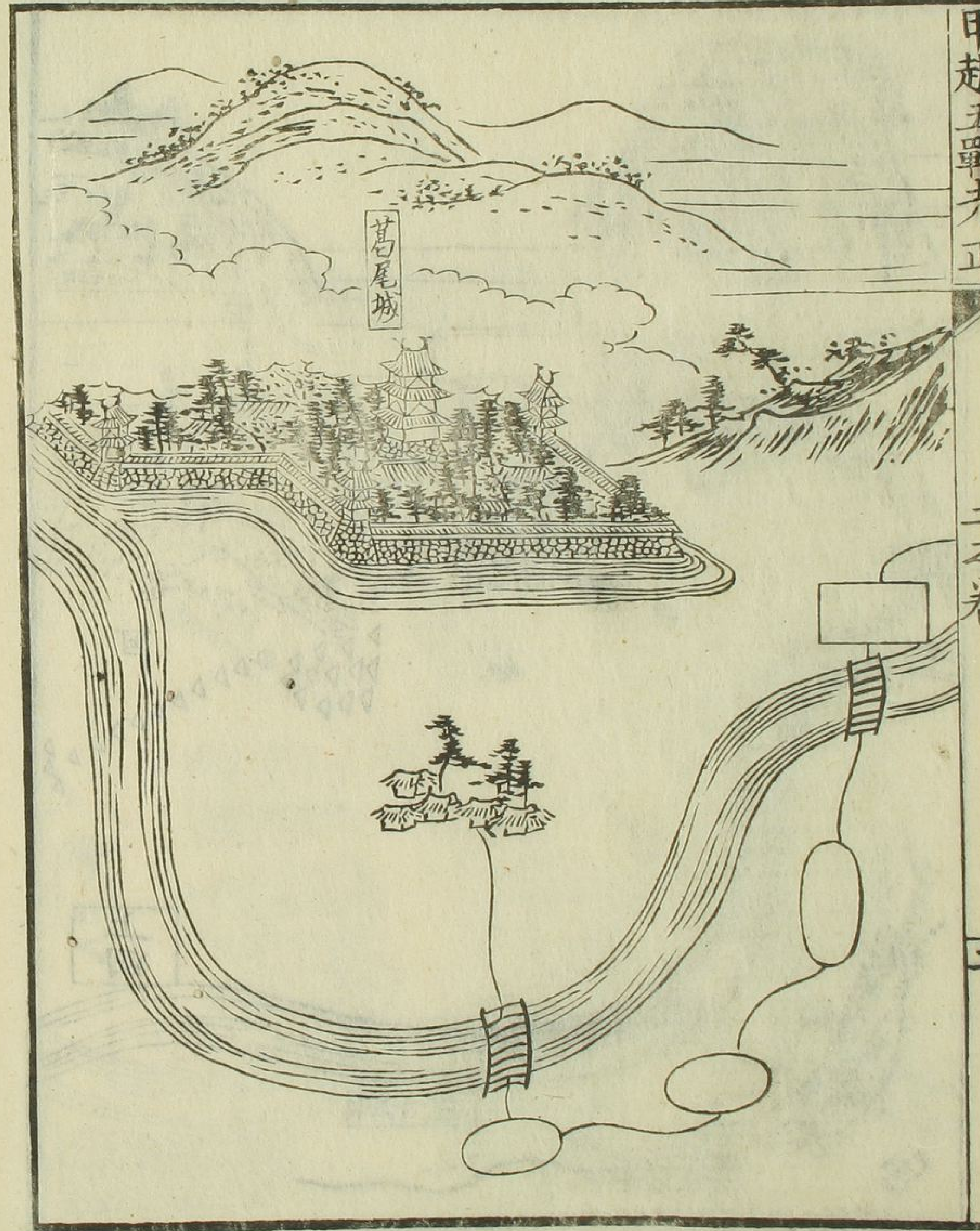
甲越五戦考正巻之一終

武田信玄公を率して信州小県の戸石の城を
囲む村上羽林云ともしばしば是を援ひ
信玄と戦ひ大ひにこれを軍を破る
武田信玄戸石の城を抜て其を常田に移す村
上羽林これを惣て去をもて再び信玄と戦ふ
村上羽林大軍を出して武田信玄と上田原に戦ふ
我軍大に敗走こを陥葦川雨利が居城に入て是
と深羽林自ら越後に遁れ長尾謙信の師をこふ

阿波國文庫
不忍文庫


村上義清陣
上田
西


東
戸石城
戸石外郭
信玄本陣
神川
常田
南



甲越五戦記考巻之二　出浦右衛門清令輯

武田信玄公を率して信州より戸石の城を囲む

・村上羽林兵を出して是を援ひ信玄と戦ふ大いに軍を破る

天文二十二年の春三月甲州の武田大膳大夫晴信入道信玄公一万二千余を帥して信州に来て村上羽林の疆場を侵し遂に海野の辺を焼き戸石の城を囲む城主としゝ援として是は城に村上家の老臣綱妻隣奥山田入道等がちから不足なり羽林さまを援ハんが為老臣等に公二千よを授ケ其の

敵の籠城たまりかねて葛尾の城下を打出ち
戸石の小すり伏を暁に出して跡居ならずの魁
村上が室賀清次ある入道海民号数井上玄蕃
并清次之子清田大炊并紀藤當る楽桜清尚
仮礼筈まりその本又宮の一黙におよんで
布下民戸入道清野又弟高梨源次等まり
兵一千余とさづけ戸石の城西七丁の人民
を加へて打合にまでかり南の大手を押
し筑摩の川原を後へよりまで辰巳より
向ふこ三段に備を設く是時村林の先鋒

の勢にハ清野伊勢守清秀若槻左京亮清尚
出浦下野守清正二陣の勢にハ屋代左馬介
雨宮室賀山田常陸介清正内山兵部少輔清家父子
相従て屈竟の騎士三百余人都合ハ足軽卒
五百余人西条治部少輔栗田丸茅川左馬介
小出三郎左衛門尉梓澤左京亮亀林能登守石川
民部少輔山田源吾左衛門清野左近小野沢五郎
兵衛平林内蔵助若林采女正香坂安房守春日
右馬介牧野島玄蕃允并若杉東条右馬介
古浦二郎兵衛ら已上十八人是を帥て羽林の

たたまいのひかしより士十六騎その後へ又
五十枚の長刀を佩ふ後室ハ東茂之河なる上
原求る等これを掌とし其の勢ハ八千余
に及へり雨宮ハ石の膝丘より村上家の
諸軍勢後殿をかうしりといさぎよく旌
旗翩翻としむらがりし勇ミすゝんで又いれ
バ城の勢おもまちかまへとゆく城つさらと
押寄さ一度まどひつし実おもバ寄手の大
勢たまりかねて三丁ほどしりぞき返く入ぞう
都の者る此勢をもて波伏の手を発し甲陽の

先陣に実践ハ井上高梨須田島津高の
魁ねも前部なる入道にかを合せて皆二千
余騎さしこみんで然要お戦ひ始ちと
かこみを破る甲陽の先鋒板垣信形飯富
兵部小山田備中甘利備前諸角豊後ら
逆し合せて救防さ戦ふしといへども利を
らずして破されは村上家の先陣は清浦法
ワつきこさよおと本陣諸将もその皆一千余騎なるに
加つて遂に甲陽の先鋒を破て追撃して
そと残らずしれ三百余級羽林を生まとへり

なをとゞめて信玄が中軍に當らんとせし時甲府の
士大に恐怖して士卒悉く鋭気を挫き
猶豫の術もなく只一時に城を継ぎて
とかくして又城中を押囲さずその虚に乗じ
てお戦は時に満氏没し我満清没するを
なと励し甲府の若軍を没ち此時に當る
甲府の魁将甘利備前横田備中が陣此
設法ふるところの多く戦死す村上家の諸
軍勢勝に乗じて之第に多きを退散
てそと優ることを断して其によりおゐて甲

府の軍忽ち破れ神川荒戸の二流に陥り
溺死するものゝ数を知らず村上家の諸
隊将勇をとて甲兵勢の逃るを追撃して其
首を斬る事九百二十一級信玄大に敗績し
羽林は砥石の城に引入て一日逗留
ありて武功を賞して諸将に感状を
さづけらるゝと又曰
此時於戸石表与武田晴信一戦之刻以
上方之勢此廻二百余討捕候事小笠原
本意之儀も近日御満足諸人々自然案

旌旗を以及一戦之処入道無度励候
然押破於信之軍勢被 井利備中 披露候
之の不移時被撃之武功無比類候尚
於猶忠心諫議為信之計策肝要存候
謹言

天文二十二年三月六日 少将 朱印

入道
顕忠殿へ

今度於戸石表与武田晴信及一戦刻之
方一族被官之者抽諸士突崩敵勢所
於為信被十騎討捕 横田備中 組之者
無合戦諸人顔色之武功無比類候亡
父弥三郎并虎昌父子感状雖在之震
英於与弁就中加増并添
忠功之間重之事付属与入道顕忠
可有之者也

天文二十二年三月七日 少将 朱印

小河小次郎とのへ

武田信玄戸石の城を攻て軍を常田に移れ
村上義清を憩て兵を休して再信玄と戦ふ

武田信玄ハ先日戸石の役に究竟の勇士数多討れて悲念骨髄に徹しすなはち遺恨とし和計りて戸石の城を攻るが由りをまし求め密に戸石の番兵矢沢右馬之亮と云るものヽ真田幸隆に縁あり遂に幸隆によぶらりさも彼の旗下ニ一族等変心して信玄に通じ信玄大に歓び金一万金を遣して密に小室の城を没し再戸石の城を囲むれハ七月十一日の夜に城兵等禦ぎ戦ふといへ共附入に附入られつゝ彼逆徒が一族等大いに城中に放火ち二の郭ヲ乗入れハ此に於て城代容妻陸奥入道清滝山田備前入道居昌等大に慌く兵士を励し彼矢沢右馬之亮と相戦ひ其の兵を斬て残党を逐散し大手の木戸口に寄しみ因昌清滝ハ信玄ニ名ヲ一子勢を相従へ城ノつを囲むく甲州の先鋒に対闘し囲を破へて屠る々窮ハ吾妻清滝ハ勇気絶によるう

加賀又八はすゝみて剛勇の魁なりしか
士はせんぐちに接戦数十合して敵を討る
こと十二人ま首を数り亦の底を破りしか
しきりに防戦は山田入道是をとりてその
危さを救け属和戦ひ急を收めて城に
退らんとは甲州の急にせ事よこ寒し隙
鼓をならして須藤は村上家の魁なる
防き戦ひてとくも利かりけして大に破
し国昌清縄等も客すく遂に戦死は甲
州の先鋒並気をゆるく城戸を破り城中に

寒戦は城を落るを防ぎ戦ひて戦死はなほその又
穴し此時に当つて城番士の目今は小郷沢
太郎丸県の尉瀬沢玄蕃今井京渾正等その
皆一手の精兵をうちて甲軍の後へに乱入しが
その兵は須に寒入して須角秀後し未戦
修玄大に憤りして其の弓山並道鬼と
て須角等を後に加へし繰出しを乱す
加茂後も又是に加つて防戦は是に
於て戸石の城を遂に数を引し常田
に旗押立て段急を集めて村上羽林

是をきゝて大に憤りけるに数ふらくらく
ゑ士と励し常田に軍立すへきまさに
こゝ小県へ進む戦ひし時を移さんとおもひ
もしも勝敗互ひに明らかならずんば村上家の
魁将たる一騎がけに池築く羽林の室
によりね加らる頼岩る入道八万のごとき室賀
の城にまるがれもどゆくしむとしかる
を従籠に十一騎小泉を御く常田より
いかり頼に主君を諫めんがと牧んく
葛尾の城に於る行きて又ゑをいーく

小室の城にありし常田合戦といふは所見に
さしたる村上羽林より出浦下野守吾妻久
乱丸へ賜る所の感書ありその文に曰
今朝於戸石表与武田晴信合戦之刻抽
諸卒令働於御前感悦候
自身之働敵之騎討落并被疵之
粉骨討捕首十七 剛勇之至武功太
以神妙也向後忠節之外他に
増ても 弥可抽軍功之条如件
天文二十二年三月十三日 少将 朱印

出浦下野守ハ
今朝於戸石表矢沢縫殿ト一騎打ニ通
リ武田晴信ニ敗ス大城中ニ引ク其方又
兄敗走スルノ所晴信及一戦実否ヲ欲
清ス依テ討取返シ敗十余信玄勘弁
勝挑戦シテ留遂及敗軍一族敗走スルノ
敗多ク討死ノ後出テ又清縄入道
感賞忠勇トモ貴ハ出羽守十五貫文ノ
地ヲ加増シ尚入道ノ旅出寄ニ中ルノ之

天文二十二年三月十一日出羽 朱印
吾妻久九郎へ

一
村上義清大軍を率して武田晴信と上田原にて
戦ひ武田方を破りて諸将甘利左衛門か居城の
是を保科義清自ら戦ひて遂に安尾強弓師とて
武田信玄ハ此日戸石の城を攻ぬこと大に敗
てまさに小室の城を落し常田の兵を救
火して遂に上田原に入る村上家の侍

身のほどしらじと頻りに葛尾に訴ふ昔日
よだかく村上羽林を恃むを察して軍
事を談じ終りして羽林又信玄に云て曰く
武田晴信その身一が不孝なれども欲しんとて
父信虎を追しより以来積悪日々に
甚しく寝ともすれば予が封境を侵し或ハ
諏方頼茂が疆場に入て乱妨なしかつ及ぶこし
遂に頼茂遂に彼がために横死させ
その孫を押領し莫々の志を逞ふし予が
疆場を侵さんとのこゝろ伏兵なる長時

等が不服を抱して民屋を追捕しなほ
至ては庶民の苦しみをかまはず信玄が
不義無道の所為あげてかぞへがたし
予是を憤りて彼を誅戮せんが為めに義を
以して彼と相戦ふこと已に度々なれども彼が強暴な
虎狼の勇なるが故に未だこれを遂ること
能はず是によりて今管領に援兵を乞
奉るにすぐに当国安実京の大守も碓氷
嶺に出向ひ彼を誅戮す信玄是を聞きて
真田幸隆をして実京の旗鉾をかたらはせん

昴に擬るかかりんとを衛りぬまはて小鉄
の遠侯も上洛して昴に援兵のたよりも
なかりしさ波是を察して高城を乙く引
入し昴が討門にさしかる是寄が取へ不之
卯ら速に兵を出して晴信が所をとりんすん
ハ兵も京西城すべきつり八死生存亡の働
明らに渡文ま汝等一條切りの合戦を
逆くへしといつく諸将に強く宣と
騎らまさ諸豚将らるものより諸士より
立のすさく弓矢をとらずさくへし先令合を

かしていふ第ハ又そに信るへしし旦明る一
戦に及んとく兵士それのそハ取る掛かられ
しそのの號合厳重に戒らる寄に宝鰐
滿氏入道若穴寄るハも焼村上家の門寄さ
まかく藤代股肱の信ちり滿氏家に
まき洞林に満して田信が一族寄君をとて
奉らまゆれしかれ今宵信玄に落ちら人被
すらくに去年滿氏を家に招くとしなり
信玄の使に對していふ吾不肖といへとも
数代の恩君を棄く服おの然諸に随

不忠の名をとらん哉にゆかんや丈さすれ
再びはかりしハ災(かう)て是非に至らんと大
に始りしこと史を遊戻まさの後信玄
又拝しきよしにもと指示をかく徳と
原のし満氏を近んとしれ終もしも信又
に承りし寵臣(ちやうしん)をまもし八彼も又間士を高地に入
信ら一族(ぞく)寄二心あるを絲をと言て公
慮(りよ)を報(とどろか)しまゐる信つらく彼が心を
察(さつ)するに満氏をさへまするにこれを原し
策るを設(き)するし称(しやう)しく招さよせ

方(かた)さしして密(みつ)きんとの謀略(ぼうりやく)あらん彼徐
らハ信まりさ謀(ぼう)らん信玄が智計(ちけい)窓(?)あら
るよたらんや反間(はんかん)を以ふのもちをまと
つうし隠(?)く出之ける時に高梨政頼(たかなしまさより)次因
親(ちか)満二人のものを殺(ころ)く是をとるうしし
せ小井上清正(きよまさ)門山清宗(むね)清卿の清秀(ひで)宮共
にあて同満氏か首を極(ごく)さり終にしとしも
信玄公ハ疑(ぎ)心をさしくたし満氏か降(こう)
とゆらすへりんや兵降を赦して満氏
を招くしえとも彼明らの大降(こう)に附ひ

さるほどに縮計をりかに役なし続き
ハ満氏が御所の御邸にうつくハ何もれ羽
林又満氏をかく相く田沖の忠忠二人
余れる人々又被絶系するに及バん沖ハ
ま晴信に属く紹謝を行んとせらるに
へしも其行ゆゑにく敵のうれへに横穴
せ於戸の羽翼を折しまに似たり百年
の芸華へらとも時ずしれハ浦く終いやま
つなれしのさまひく入道親ぬる
がうもうをといふうは、をあまにあるが、いく入

道を遂に葛尾の城まで攻さんとて羽林よ
相従ふ人々にハ高梨摂津守政頼・井上
左衛門尉清政・清野伊勢守清秀・島津の
将として其勢二千余騎二陣に須田大炊介
親満・鴻津左京亮・綿久云田飛騨守清幸
小田切治部少輔清定・大日方上総介平武篤
二千五百余ニ陣ニ逞云百騎是を掌る
魁将ハ山吉清吉清家文子加治く騎士
三百余歩兵三百人長柄の射手二百人足軽を持
掌るの司宮沢与五郎吾妻久九郎右

馬乃尉　杵淵(きねぶち)丸　来亀屋代源三郎　岩井が嫡子　林絃
光寺　重井采弾正　綿内(わたうち)源太左衛門　清野源太郎
小野沢三郎　若菜平林内蔵允　若林采女
長坂安房　佐久間(さくま)大学　牧島(まきしま)玄蕃　永井
右京　東條(とうでう)右馬介　浦野民部　已上十八人者
羽林の中営(ちうゑい)に候(よ)ふまゝ　羽林の丸右よ相
従ふ。上士十六騎、その外より小身十枚の者
力を候ふ不理(いりまぜ)十六騎
坂井小五郎　驚田掃部　天田迎之介　小島小次郎
九田市左衛門　市川戸之介
元黒源五郎　寿田勘左衛門　浪形源兵衛　坂田内蔵允
萩野出佐　三井陸奥　武井卿左衛門　寛仁兵衛
左軍ハ室賀(むろか)出羽介　酒匂(?)右軍ハ

栗田(くりた)刑部　附属(ふぞく)の兵一千　究後軍山田若狭守　采配(さいはい)
三河守　上原求馬　兵一千五百余　都合二千騎一
万余に及へり。是夜二十三日・寅の一点に及んで
葛尾(かつらを)の城下を打立、南の太平岩鼻口(いはばなぐち)よりまさ
しつかりと進み、物もいはずしづしづと明(あけ)ぼのゝ
軍兵一万五千余、千曲川(ちくま)を渡(わた)つてようやく十瀬よ
備を設(まう)けし陣取り、村上家の先鋒(せんほう)なる製
政(まさ)よう井上清正(?)鼓(せうこ)を鳴(なら)して競ひ立
む。甲陽の先鋒 板垣(いたがき)河(がは)なる小形隊を
小山田備中が徒(と)先隊(たい)を激(げき)しくけげまして

相戦ふ清正敗れに及ぶ利いはずして三丁斗
り退く甲陽の先鋒是を見て急に競ひ
来る村上家の陣より之を見て清野伊勢守
清秀も是を見て大長刀を振るひ来るを下知して
士卒を励まし清秀も自ら敵に当り甲陽の先
鋒に突入し屡相戦ひ敵を討ること千余人
井上清正高梨政頼も是に力を得て返し合
せて打掛る後陣の須田新左衛門小田切清定等も
まき相かゝる故忽ち甲陽の先鋒を破りて其魁
将板垣信形を討て是を奉る村上彌林是を見て

て甲軍の遊兵八百余騎左右より進んで競ひかゝ
すんで防ぐ中軍より後詰甲陽の先陣
ござ戦ひしかども利なくして敗走し
村上家の魁将勝に乗じて頻りに
追撃し敵を討ること一千余村上の将林清
将を励し義清が一世の運命今日の一戦
にありと決戦己の将卒を励まし尸
を踏で身を万死に擲ちて
高声に下知し士卒八名勇気を
そゝる村上の将士眼を怒らして合

しかりかじとし首級を奪ひ合と傾
け死人をこえこえくしそのいこさらひ究
然しして孤やの地を出て再度に敵
をがこししけはにあかくて諸将大に
崩れて死ほしたるく又男を助けん
兄ハ義をを家をましも身を助るに
これハれ切入了衝入あ旅にまに乱れ
戦ひ旌旗東西に靡け血ハ流れて統
摩のまの彼小亀をこえ死骸ハ蹄に
充満して丘陵をなしてたてさまさけ

かる童ハ縦横して天地を振動す之
塚には屍を積て死人を踏みて血を蹴
て息を継その者ハ武田信玄公を
さ目をかくして自分兵士にならん立又返し
合せかく力戦ハ言に村上家の諸士共
云を雲とふ十八ねの中の魁一しぬで
また中沢又京亀田季蔵櫻又京を
清為なまなをと死しく信玄しを双を擬
甲陽の主君をとさて國季清為を退ぶ
こき戦くに宝季大きに怒りてを出で頭を切らん

乏ゑし信玄の太の扇を拵るとき二
之ヶ所此時甲州の士とも池かく
防戦しゝと扶けしゝ近く清高
国季等に婚しく欒をなしく甲軍是
遁るを追て池に行し雷の池に落く
平砂を見るに似たりしとれに高て
葛尾の城下に火周につけ左くとの
かきて城兵等周章のらしその郷人
楼の叢をとゞし是二の郭を殘
らしむる所の小村たを禄漂原等が

不意をうたれ實にめくく村上家のと忍
小野沢太郎丸来の尉茲井某なる等幼足
村上源五落人を扶けしく攪くとうら落
逗く城代在代丸恵の尉忠国と遂亡二百餘
計をね浪へ一方を切抜く其よ幼君をと
枝く甲陽の陣営葛尾より火ゝりるを
見て河野ゝ錬移に討取られしいふ組に絶
ゆもし武田方馬ゝみ作鯨を始として
志田源五郎等小山田備中等を始
ニ子井瀬戦をなしして敵ハ見こそる

村上羽林是を見て態と采を執つゝ
石を返らしむ甲乙の石この盤に家
して並べ双ひさしける是に於て村上
泉の宴まさに破れんとし入道親宇多
ハ其のさんしいえなく百済井の津へ
南の大子に押けるが此旅を乞ひいうよう
まさくるとならして池亭の羽林を諫
めて日思ふにいつやく高尾に御旅を
遁けりも送流写を諜して渡平波云
し氣高を逆らるも彼法師のそこを打

しつの保暢の院要の仕事なりんと頻に
いさうえけるさくに於て荒椒清尚承度胡
実をもして般に偏へ歎皆を趣かりを羽林
いを皆子多人を御して泉口に掩と
をし立彼是をもて紫しきなりし荒椒
在京を清尚家度三河守胡実等之を動
一子井南の大子の岸に偏へを設く
清印伊勢守清秀次田大炊助上京東島
等も家に端止くこも皆郎合二千余井
まく甲列皆の魚をこさらを治居らむ

頼みなく寄来る謙信の軍勢一度にどつと
しかけ寄る若槻清尚粟皮胡実等ハ
塊を枕にして死をもまうけ太刀に
なりくし謙信いかゞはせしと救十文字をし
まさに励まして救ひく方武は甲陽の
若又池かくて井清範をとりて
坂のる是に於て村上の軍大に敗れ
清尚胡実等も支ふる遂に討死ん
上条清野等の股肱たる魁将ゑし合
きて御る戦ひて亡ぶともなくして

遂に引返く村上羽林是を見て軍を塩
崎に移し遂に小田切清定ら城内殿に
入る此時出浦下野守梓沢左京亀令井
京後正等も皆をおさし城外に出て
三ヶ所に陣を張る役芸家に池築く又
ふくに及べ是こそ我武清等羽林のお
に出くうてひ軍ると議れ此さ
羽林より獨承不の感志の文に曰
去二十四日於上田原与武田晴信及一
戦之刻未方一族被官之輩之

比類偏太刀神妙也、加之清尚無双
実儀歟、依之除驚諸人之目候、是武
功不可勝計、雖然至于家之口之亜
備之刻、武田右馬允殿清尚
無粉支候上者、則令連々遂防戦、令
討死之段、感之武功之感涙、仍亡父
為供養、永楽五貫文 無太刀一腰 並明
遣之候、然家名無異儀可宛行
一不加恩之状如件。

天文二十二年三月廿八日 少将 朱印

若槻与五郎とのへ

去二十一日、於上田原与武田晴信合戦、以
粉骨被尽粉骨、家儀雖依之除之刻之
方被官之上の粉骨、無比類、殊更遂
討取平武父子、励諸勢之武功、以神
妙之儀不及是、然之越合無双、猪利之條
小村右近、柿澤源次一類之者、無
行言令放火、城中之者味方及敗北
旅泉口之亜備之御以之方之留守居

設皆討取首十三級殊ニ精功ニ而可勝
計非於当家無其了究行一所加
恩之状如件

天文二十二年三月廿八日　少将　景虎

杉浦玄任とのへ

斯く村上義清は居城を去りし葛尾利
が居城を攻取て又忠信等と其外に軍
談を及へて景虎に実は海氏入道頼山岩寺に

七十余歳に及ひしかども勇気少しも
たゆまずして智謀を以て海氏が武を制
するの法を得て縦横の術をめぐらし
たまひ英君とも云べし何に海氏の発
の兆を侵せんと謀りて引く日信が一族等に
は忠勲を給ひ仰く信玄に従ふはず君弃
に軽をととがむるものもなしその和睦をなして
信玄の中に実戦し而も爽く勝て
信玄が頸をとりぬとまで云ひ景虎は
深く彼を憎みの謀略なりしかる

所入道が為に任(まか)せを被一族(ぞく)屋代 西条等(など)とし
て遂(つい)に信玄に降(くだ)りしも 此時信玄より屋代 左衛門尉に領し下
せり 又は回く此人度々西条にて判形を賜り ゆゑに此内君
柄と方へ更に東ふしく人ねがふ所にて はゞかりて隠し此出せり天文
二十二年卯月 注(かど)ありて四月も过又月に及ぶく小
越の後(?)信濃(しなの)國(ぐに) とし告(つげ)来る家にかれめぐく
羽林村上(むらかみ)越州ょく々り 謙信の館(やかた)に入て招(しやう)請(じ)
を請(こ)ひて謙信に帥(いくさ)をとも事謙信是にて回く我(?)
は武田晴信が為(た)め既に信玄(?)までと素(?)(うぢ)のまと
その領(とし)國(?)を君(す)がんがしめ終(?)に援(えん)兵(?)をこふ
此時に高つく出すとして是(?)候(?)なし

せる(?)の輩(ともがら)なれバ義士の為しすゝ而にのぞく
れし所服(ぶく)従(じゆ)に及(およ)べて羽林大(?)に郎(らう)從(じゆう)を率(ひき)ゐ
くにを遁(のが)れを謝(しや)し渡(まこと)に越後川の城に是(?)(かへ)さしむ
六月の事也

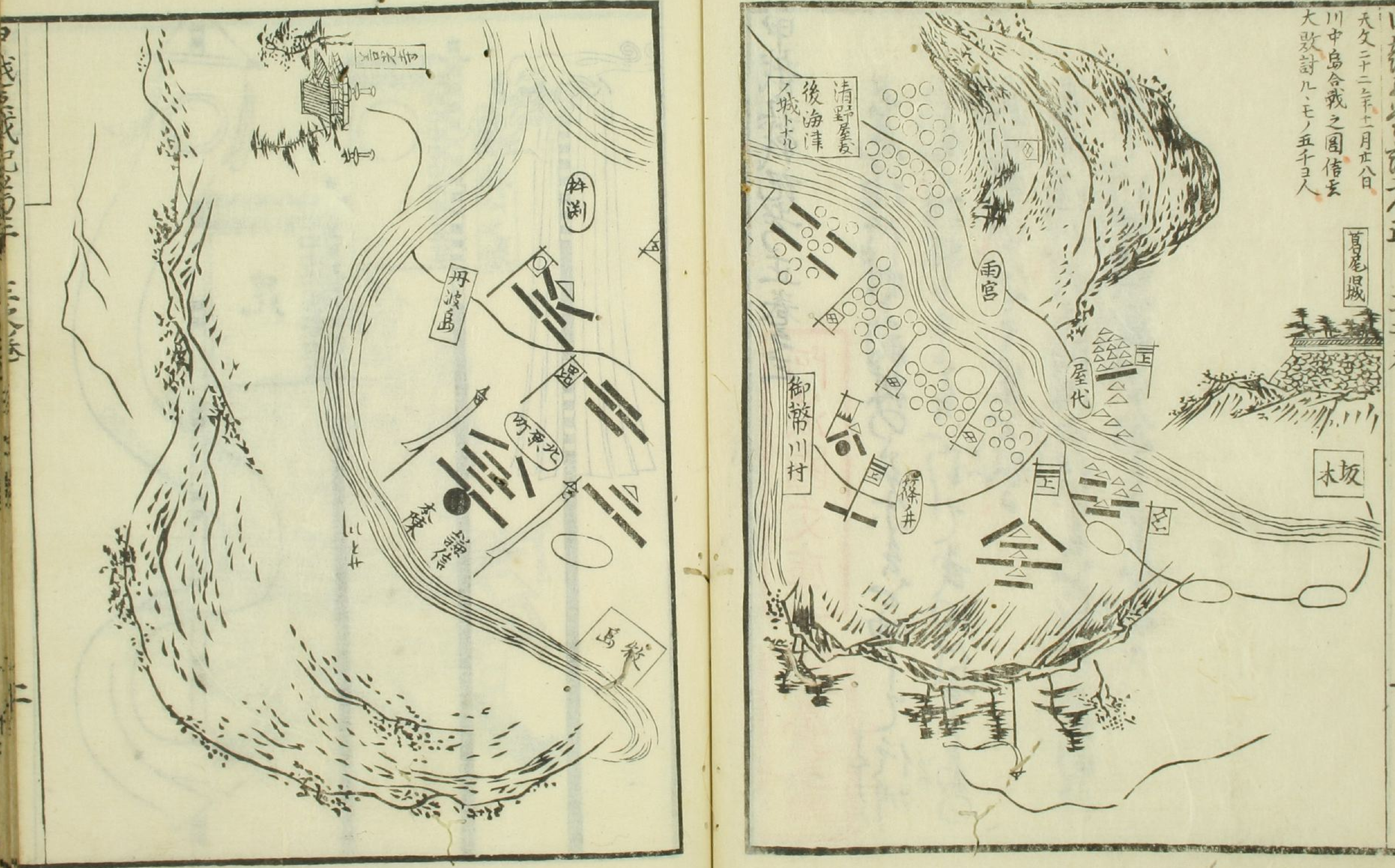
阿波國文庫

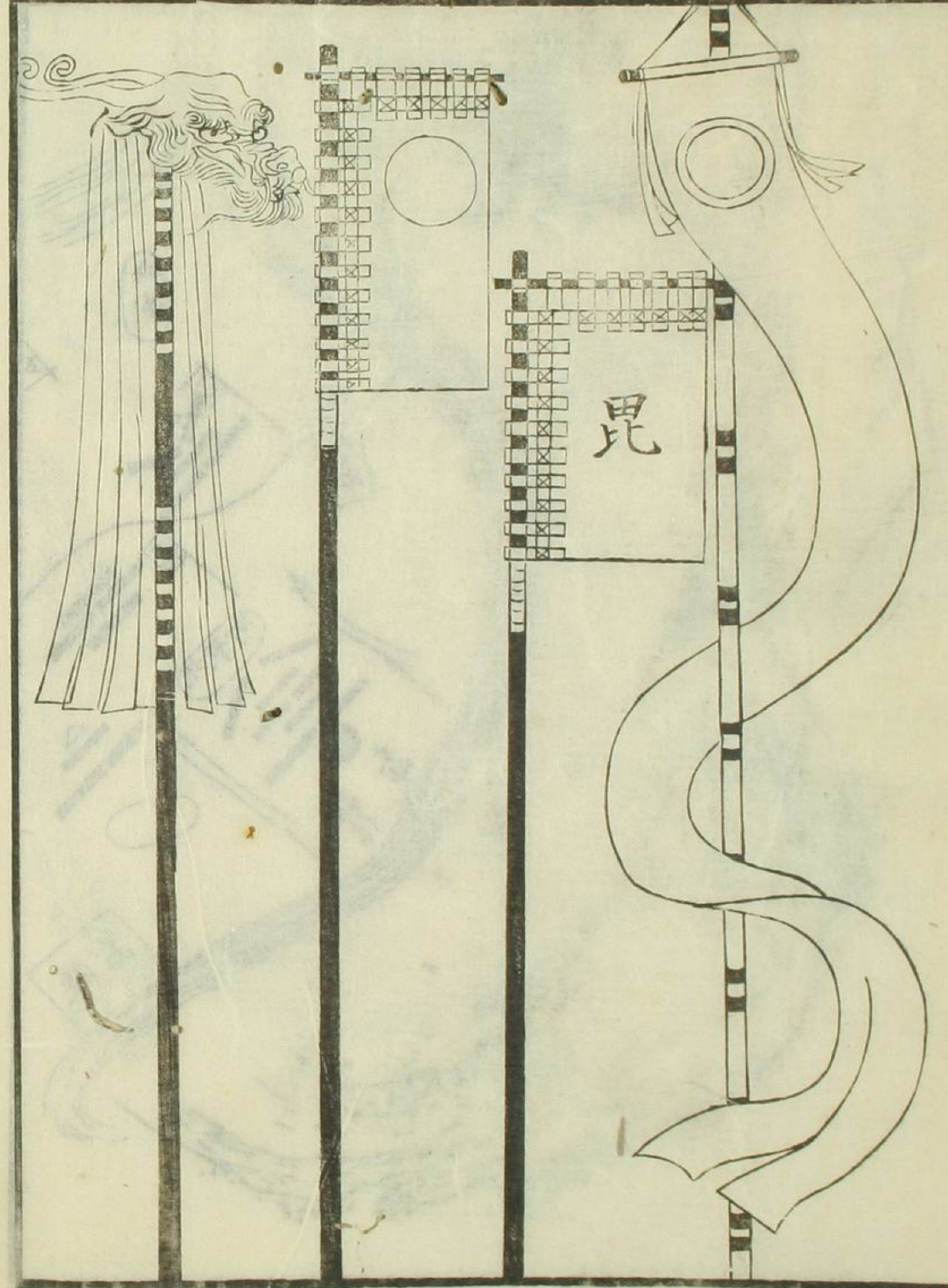
甲越五戦記考正巻之三

阿波國文庫
不忍文庫

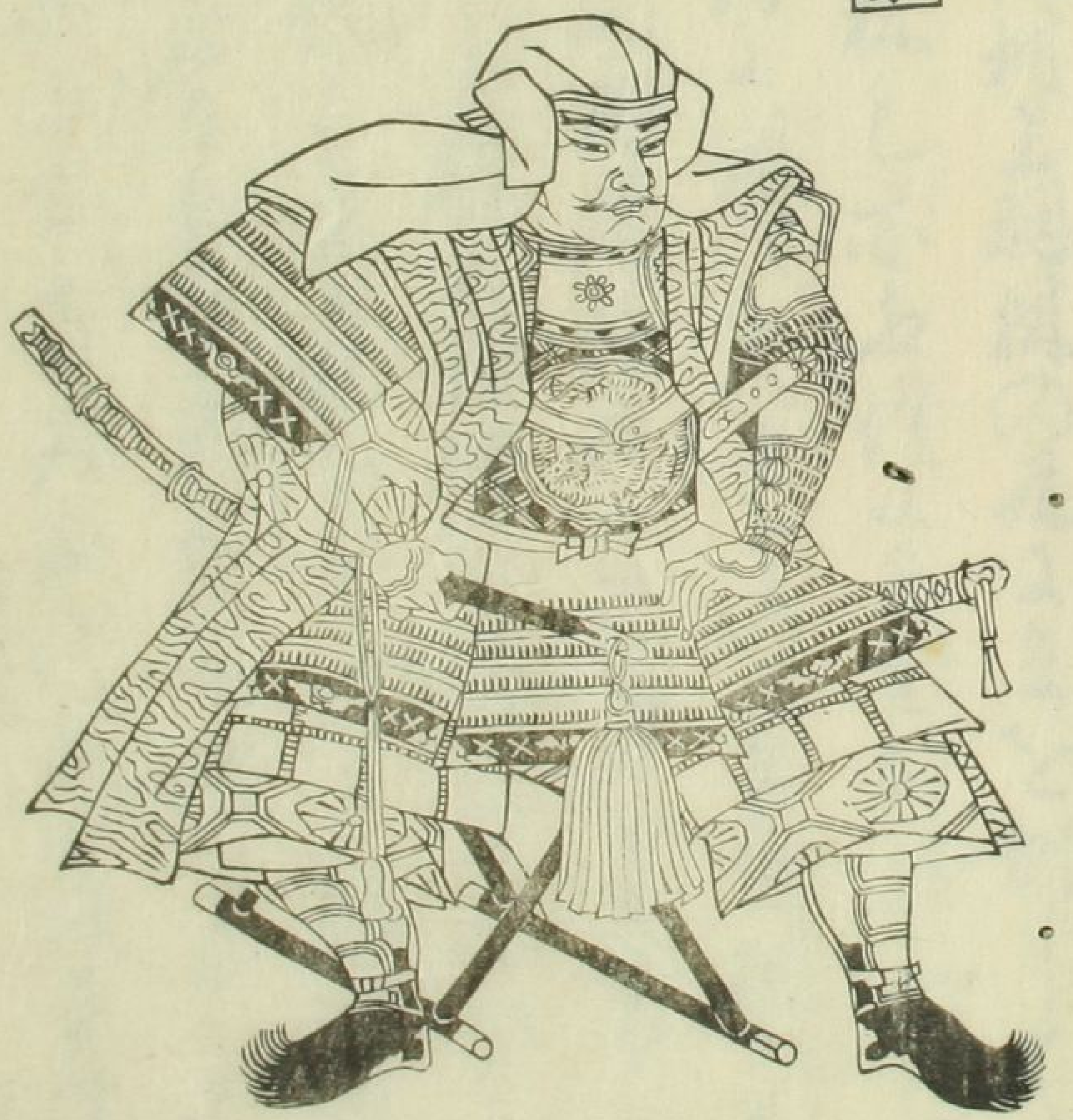
長尾謙信村上羽林の為に兵を帥して信州小県に羽林もまた兵を出して武田信玄と海の宮に戦ひ大いにこれを破る

長尾謙信村上羽林お信に兵を出して武田信玄と川中島に戦ひ大いにこれを破る


天文二十二年十一月廿八日
川中島合戦之圖信玄
大敗討ルヽモノ五千ヨ人
葛尾城
清野屋敷
後海津
ノ城トナル
雨宮
屋代
御幣川村
坂木
丹波島
謙信



越公之像



甲越五戦記考正巻之三　　吉浦正九郎信令撰

長尾通俊村上羽林の為に兵を師して信玄

・に出て羽林と亦相從ひ兵を出して武田信

玄と両度に戦ひ大に其の軍を破る

后程に小越の長尾通俊ハ後居を集めて多く

軍事を役し村上羽林を援ハすんハあるへくハの

らそとして軈く軍勢を催しぬ其從弟

其子ハ長尾右兵衛尉景義同姓七郎景定

城理を以て京山なる其子代丸宇佐美駿河守

定行柿崎和泉守景家直江神五郎実綱

大国源理を荒川伊豆守吉房田原木工左衛門
蟹江甚五左衛門小幡平八郎荒川十郎
らる柳沢利宗保田柳沢小幡丹後守長忠
本庄兵衛尉安芸守元井日向守清定今井
柳沢与利宗象友八郎利胤吉江宗左衛門
宗俊旗を先として七千余騎曲淵上杉景
勝を正して軍勢を調へ戸崎より越府春日
山を打立ち信濃の中へ入る村上羽林の軍川
の城に入りて十月十二日の夜羽林と共に
まだ礼を覆し通路を遮へ翌日十日

通路羽林おはしに兵一万二千余を引て若光
ある事を知り八幡の方より千曲の川を
渡りて西の方へ犀川にとりつき旗を
甲州の味方の陣を成して軍卒皆家をとる
足軽を召して兵を葛尾の麓にをき
先坂城の神社の神におはします村上
家蕎鉄の地なるが故なり一日ごとに
休みを取りひとつひとつ上り戸石を経
て佐久郡に至り火を放ち乱して
西の方に至る瀧川中郡に着て

ぬる二十九日のまだ明ざるに西條の麓一筋
く備を設けて筑摩川とおちあひける犀
川を渡りて越後の陣営を設く武
田信玄は是を聞て其勢二万余を率して
出まして對陣せしかば八月の初より
あり甲州の先鋒は高坂弾正栗田讃岐守
穴山玄蕃布施大和守落合伊勢守を始
二手五百斗二陣は馬場民部清野常陸介
小田切刑部日向大和守室賀入道額岩寺
板垣三郎横田源助を始として五千余

を備ふ浦野民部祢津宮内介二千五百
斗後陣は武田太郎義信小笠原若狭守
殿は諸角豊後守信玄の旗本は
和漢の勇士二百五十余騎後軍は穴山入道
嶺にて武田太郎伊勢守が陣にまとひ
を始め都合二万五千余騎さい川義元が
助勢の軍兵にて五千斗おしつゝく陣は甲
州の総軍は屋代長門の守を先として
條似巌方に備へてつゝ越兵の
先鋒長尾兵部大輔和泉守荒川

伊豆守等ハ是を始め一千五百余騎旗鼓を分ちて
驍兵ハとく西條山に挑み戦ふといへども
謙信ハいまださしたる足ハ甲越の
両将戦を合せの始終なり暮て二十七日
の夜に及て村上羽林法師に計策を旋ら
し又讒行しお送して羽林ゑぶりかへる
家臣をお迎へ陣に旋らし揺山の蝶と語らい
〃に休息を設け夜の明るを相待ちける
明れバ二十八日卯の刻ニ及んで越兵
の魁ハ柿崎和泉守長尾平八郎長尾

修理をはじめ井日向守あまり川十郎左衛門を始め二千
余騎ハ我先と争ひて筑摩川を打渡り
甲陽の先陣を撃てこれを破る甲陽の
陣より穴山玄蕃落合伊勢守因幡守と
侍ハ多く越兵の先陣を突崩し西條寺
に追つ返しつお軍ハ未の下刻に及て
小越の魁ハ荒川伊豆守宇佐美駿河守
柿崎和泉守ら等ハ都合五千余騎に筑
广の川をこぎ渡り甲陽の中営に斬
入るおりから甲陽の名利をうしなひ

て後ちたん越兵ハよく〳〵こらへて密(?)にし
競ひかゝり敵を討取る者数しれず村上
家の魁将たることをとり〳〵彼(?)の名(?)
の働きを強(?)しく備を激しく甲陽の
諸軍勢に突戦し東(?)に殺到く雨之陣を
破る信玄大に怒て頻りに諸備を励し
軍方より下知をなし立(?)しとも一旗(?)後ろと
知らぬ諸(?)党の所(?)へ会(?)ふことを許(?)さず甲
軍忽ち後れ(?)をとして討死するもの数
をしらず此時室賀入道部兵衛るハ馬端

民部板垣之助が徒の和(?)勢一同にかけ
ふり後備を急に見て天を仰ぎ地を
傾き回東の厚恩今謝しまゐらすのとき
いさぎよく信玄が頸を切りて昔日君羽林
の憤りを散じまゐらせんと心中に思ひ
を含み譜代の良党によき(?)こそ皆
一命斗(?)九に偏く信玄が中営に突
入し和戦ひ敵を討とらしんと百余
信玄方に(?)勝(?)ちて防ぎ戦ひけるとも
後には村上家の諸軍勢も次第にのご

しく隊を激して競ひとゝおより
もし又越兵の魁たる者備に乱して右
遂に是に於て甲陽の兵大に周章
しと見えてさまに崩れし旌旗東西に
靡け戦死するもの数をしらす武
田左馬助信繁小笠原若狭守郡内勢
ぶ横合に突入し面前を戦ふとも河を移を
ても真田弾正左衛門尉幸隆の魁も
又是に池加りて防戦しに寄て入
兵數兵気て了とみへんで兵士を励

自ら敵陣に切入りて首を斬ること多し殿
し給ひしとも其の身を救ふ事の疵を被
遂に寡くして戦死し
・澤は日滴氏入道顔忠は主君の為
に働く所言に随ひ其の深恩果さ
すして遂に戦死し無二の忠忠と
習ひし滴氏が忠義烈くとをるとし
同巻の民に及ふまくに口を交へて
賞すること稀なり其の父子兄
弟世く村上家に仕へて忠忠を篤く

嗚呼惜い哉源氏が亡びしハ是羽林乃
微運とぞいふべし又彼人の亡ぶも命
なるか歟
此時に当て村上家の魁将たる高梨摂津守
井上豊後守須田大炊守清野伊勢守
常田石見尉出浦下野守小野沢五郎兵衛
今井東源正為勝よ多くして競ひたる
追撃しけるを取る事一千五百余級
須従も又甲士を討とる甲陣の首
と追撃して捷るとし三千余級是を旅

て甲陽の軍遂に彼が股肱とたのむ所の板
垣三郎等の勇士を始として粟田讃岐
守横田源助究山主膳武田大炊守菅
谷九郎深田三郎兵衛常葉郡語が信
継に戦死ハ且今川義元が助勢の為
旗日源左衛門が徒もまた戦死ハ注進
よりて使を以て此旨を大樹義晴卿に
言上ありしかば此時村上羽林を信濃守
国利に偶ひし感書ならびに文の同
去月廿八日於川中島武田晴信一戦

之刑把宰忠討捕候ニ付此段御太
儀神妙之至ニ存候依而恩賞所望ニ依
高清野伊勢守ニ申付候也

天文二十二年十二月二日　晴信判

芋川右衛門尉殿

天文二十二年の秋八月長尾謙信ハ

大軍を催して信州にきたり村上羽林の
居城なる葛尾の城に入りぬ是ハ羽林
を謙信の本領へ送りおかんとの事
にして謙信羽林が為に惣軍一万
余を発して川中島にて戦ハんとの
羽林謙信と評議して越後勢ハ六
千余人本陣に控へ陣場ハ井上左衛門
清正高梨摂津守須田大炊介等
凡一手に百余騎二陣に芋川右馬尉
清野伊勢守清秀出浦下野守清正等一

子息諏訪羽林の左衛門尉より信常
小野沢太郎左衛門尉平林内藤兵庫
左京清尚中沢下野重井原隼人近林源左衛門
之丞渡辺石黒八兵衛滝沢玄蕃小野
沢之助宮仁兵衛坂井小次郎坂田内蔵
若妻小太郎須田新露田勘ヶ由大田
速も助林民部西村下総九田市右衛門内
源太左衛門上原馬の諸士三百余
三騎合子息越兵の魁
川田對馬守川後守源次郎

栗原源次郎其一手六百計次に柿崎和泉守
小幡安芸守毛利上総介大関阿波守本
庄美作守斎藤下野守松川大隅守中
條越前守黒川備前守新発田
尾張守加地但馬守北條丹後守須賀但馬守
杉原壱岐守鬼小島弥太郎鬼山吉源二郎
黒金治部直江入道山岸宮内柏崎日向守
大崎筑前守桃井讃岐守宇佐美左馬介甘糟
近江守本庄出羽守安田伯耆守飯盛摂津守
竹俣筑後守平賀志摩守長井丹後守山

周備る右二十八組名二郡よ而並んくを
む通郡のたちよは字紙更渡郡ある松本
大学松本門通私ある二千余俵家は花尾
越おる段京同姓源で前京久民アお浦
京郡荒河郡実京ある越列の物家よ
飛騨ある又縄を設く武田郡玄もまこと
太冥を卿ひく高よ米く而對人畢
両のたん縁ある坂深山布施太和ある落合
伊賀ある小田切刑ア日向大門藤堂蜂須賀家
ある塙民部ヶ境よこく高二万七百斗而余

到くする田沼山城守保科濃守牧野和泉守
常陸ヶ境二万斗ほ二條ハ濃野常陸守
是月なる人ある栗田郡鈴ある屋代丸岡府
二万七百斗よ郡よ仁科上野守郡田而横ある
根津山城ある井上伯耆ある而余すこし
而隣りしく武田丸馬守郡盤小笠原小笠原横ある
安松坂垣縁郡ある郡沢ヶ郡郡縁を整ほ
又郡舎の丸ちよ而郡人勇士坂西長兼
郡弱太類守七更弱壁太久保内膳守将
内通小山田ほ斗山本勘助弱浪ほ統

くらに三百八十済にて跳んで甲斐須賀兵衛
下山河内守甲部入道がや飯尾入道浄永
和加尾治部左衛門尉ふ須川入道が従
二千又百斗甲州の物勢一万八千余と申
由到く村上家の先陣ふ栗橋津守井上
並屋介ふ須原信濃守智斗を用しことの
歩卒小室平九郎安藤八郎兵衛ふ騎卒
三百余を拔けしく敵の惠ふへと道路よ
伏をとき敵の助を待居ゆ頃しも八十
八日卯の刻斗よ及て高梨井上等

か騎卒凡五十余人兎ても敵を溝へ
甲州の先陣高坂弾正が兵百人斗り競
ふかゝく村上勢を追拂ひ切る下る
頃に百余の伏兵俄に起く甲兵咎をさ
中よ包圍し一溝も残されば接これけるぞ
甲州の魁ぬる坂藤合布施海野が徒
是をみるより直に一丈余の池へさしより
おまを援んとハ此時村上家の魁ぬる
須りし士卒を励し競ひをんで松戦
甲州の先利なく役ハ井上清正

る粲段頼等並ゐてそを称するゆゑさ
一百余級を得て、かくて甲陽の先陣勿ち
段光は二陣の吉田原科が徒又二千斗
を帥ゐて池東へ已に進み来りを挟けて是
を拒く清正段頼は戦ひ村上皆遂に利
なうして引退く吉田原科か飯富合
勢を加へて競ひ来り疾く通
より村上羽林是を見て頻りに兵士を
励まして戦へ甲陽の兵又池[illegible]くて
斗方に村上皆の中軍に[illegible]戦ひ宮に

、なかく羽林の軍ますます破れんとしけれは羽林
大に憤り荒波の旗本二百余を左右に
従へて自ら兵を進めて吉田率へし
戦ふ時に屋代利出浦清正小野沢備後
等も羽林の先陣に左右を擇ひこ
進みて高く敵を揚げて拒ぎ戦ふ甲陽
の旗将等もますます励みて追ひて両陣
互ひに勠力して進むさりけれは戦ひ
の声天に震ひ地をとどろかすばかりなりし
越兵の旗将等是を見て川田対馬守と

さりして犬川御殿なる敵源次郎影綴
田尾淡路守杉原常陸介等は皆二千計
村上勢よ加はる勝林の若き者まで力を内
てまた兵を以て甲府の先陣を破る故
原影綴田犬川なる梨川田の雲雀村に
皆しを後退ひて敵を打取りまた二百余
級を得村甲府の先陣二千計又返し合
せて匯戦に村上皆利あらずして
又丁子川返く戦兵の鬨ねる声をとこ
て撞鼓をならし脇を激しくしてとん

て兵戦ひ兵ならはためく真田源料へ流れを
うしろして大に殺され真田幸隆も又疵
を蒙る事二三ヶ所いまた退かれに村上勢
源二郎報治馬を乗して幸隆に刃を接
へ今んすし彼を組伏せて腰板の透間を
さし取す二三安斗流よ荒く見へし所に
幸隆ヵ二郎筒細屋是助是をとみるより
其一丈余なる池来りてを挟けゐる敵
報治か高股を切落し返しに報治ヵ首
を取る幸隆も深手をおひて疵破壁

て遂に引退く保科弾正も又数ヶ所の
疵を蒙て郎等に助けられてやりしの
陣に引退きぬ是において甲州の先
陣大に敗北し戦死するもの五百余人
村上が勝に乗じて競ひかゝる越兵の
兵ねも又其をとゆく敵を斬ること甚
夥し甲州の魁将海野望月仁科ゞ続
又池加つく六千斗兵を激して挑戦ハ
越兵の其利なかりしにて敗ハ村上も
又引退く甲州の魁将勝に乗じて

其後も此時越州の隙より葛尾下野守
猛将和泉守小泉安藤ら色部上総介
大関江口浪ゝ為に皆凡二千斗旋旗を靡
し各其士を励し味方を援く右の陣へ弓
つき備を乱し其八千余の兵を固め
し犀川を打渉て通備の後軍に突
戦ハ越兵の其陣に戦ふとも之を利
なく尚しても敗北ハ備の兵の其勝に乗
して其東の越兵の隙より突流失強に当
定引し兵来て皆二千斗甲州の後

へり実ハ宰沙(さごゆう)も自ら敵(てき)にくだりけり
士卒(しそつ)を励(はげ)ましてわが戦(いくさ)へ後(おく)れ起越中ある翔(かける)
その鋒鏑(ほうてき)に五百余をおし従(じう)へ宇依宣沙(さごゆう)
小池(こいけ)加り競(きそ)ひまんで邁戦(たうせん)ハ温佐是
をとゞんとして送し合を自士卒(しそつ)にしたち
血戦(けつせん)ハその鋭気(えいき)当(あた)りがたくその尖(するど)さ
る迅風(じんぷう)のごとし甲陽の陣営書(ことごと)く
おそれ乱(みだ)く是ににわかに温佐忽(たちま)ち
伊玄が中軍(ちうぐん)に突入(とつにう)し右ねぢなる刄を撓(まげ)
ておれ戦へ伊玄本陣を被(かうむ)る事一ヶ所ならずしこと

へつて甲陽の壬士是をみて涙と捷(たすけ)く
温佐(えんさ)を捕(とらへ)て温佐蠟(らう)ぐその芸を討(さ)んとし
ん二十余人是ににわかに甲陽の軍たてよ
乱(みだ)れ摩(さい)川に溺死(できし)するものその数をしらず
ハ伊玄の令弟丸馬公伊盤(のげん)是をみる
よりこれを見して温佐に実戦(じつせん)ハ伊盤
遂(つい)やをたてけん遂(つい)に温佐の為に死(し)ハ
伊玄なる鷲怖(きうふ)して壬士七十余輩をお
従へ走(はし)ちに海津(かいづ)の城に登(のぼ)らんとハ村上
氏の陣より是をみて寛堯(ぎやう)の浪士二百

諸士續て並へてくゝ競ひかゝり追崩し候ゆゑ
急に甲州の勢も小笠原若狭守
板垣信形が陣へ退き合せて防ぎ戦ふ
といへども利なくして政虎村上
皆卒を以て敵を討取る事一百余級小
笠原板垣二人数々の疵を蒙り退く
是において越後勢羽林を始として皆
を励まし追撃して首取る事二百
余級信玄大に敗績して甲州へ
こたび偏へに感状の文に曰

去十八日於川中嶋与武田一戦剋七方
江手皆入横槍実崩信玄旗下家
沛弊川通信与信玄家老太刀合
之砌七方節為之人無合粉骨之感
悦不浅候猶期後音可申也

天文二十三年八月十九日　政虎　華押

宇佐美駿河守殿へ

一昨十八日於信州川中嶋与武田之戦
而勝利令身在る処信玄敗走之所屢く
之千余討在之築江修理亮武田か
陣之家臣与信玄家臣太刀を合せ
二刀中より切付しかハ川中嶋御強寅
晴信ハ主ニ忍ひ候て其後信玄ニ清兵与へ被下
中入以忝ぬ御祝着候

八月廿日　　政虎　華押

吉田美濃守殿

甲越五戰記考正巻之三終

阿波國文庫

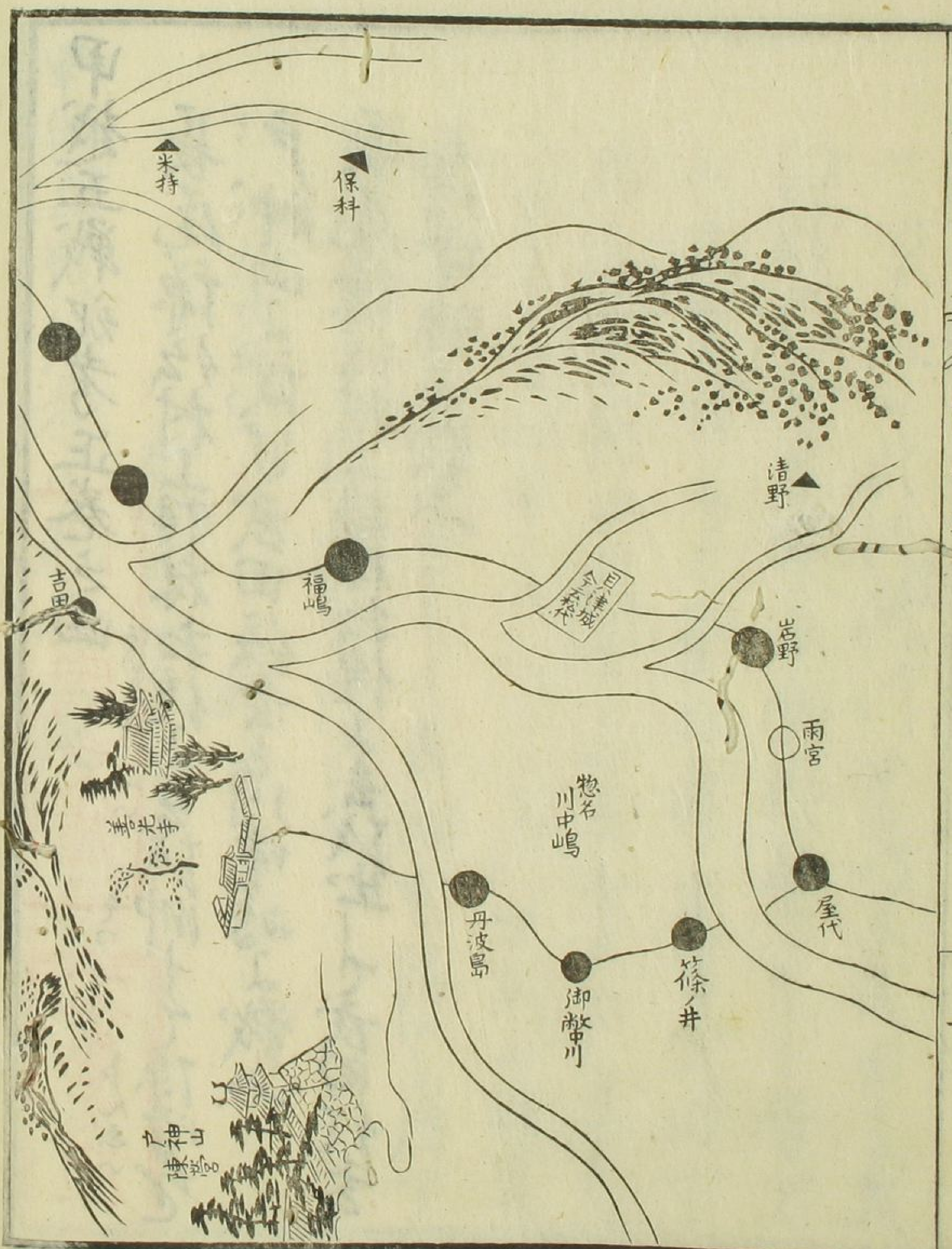
甲越五戦記考正巻之四

阿波國文庫
不忍文庫

一 長尾謙信村上羽林を従に会戦卿して陣営を戸神山に設け武田信玄と川中嶋に戦ふ

一 長尾謙信村上羽林を従に会戦出して武田信玄と川中嶋に戦ふ

須坂
高梨
井上
竿川城
牟礼
古間
柏原
野尻


米持
保科
清野
吉田
福嶋
岩野
雨宮
惣名
川中嶋
丹波嶋
御幣川
篠ノ井
屋代
善光寺

甲越五戰記考正巻之四　吉浦氏家門人　清水令輯

長尾謙信村上羽林を帥して陣営を戸神山に設け武田信玄も川中嶋に戦ふ

弘治二年の春三月長尾謙信村上羽林義清に兵を帥ひて川中嶋に至り戸神山に陣営を設る、其先隊は宇佐美駿河守定行長尾越前守景勝二千計二陣は甘粕備後守清長斎藤下野守朝信長尾遠江守藤景、鬼小嶋弥太郎山吉孫次郎重繁新発田尾張守五隊は其勢二千五百計四之陣、

柿崎和泉守景家本庄越前守作右衛門
新發田由理亮長敦中條越前守藤資
吉江喜四郎色部修理亮重長等を始として
各十二隊にて都合二千余人以て先陣の前後
に相備ふ勇士三百余人後軍は竹俣筑後守
を子右衛門山本寺庄蔵将軍に新發田
尾張守長敦黒川備中守直江大和守行
因武部等あり村上雅林の先陣に宇佐美駿河
楢津ある殿松井上野守清政清胤伝騎ある
清秀等を総一千五百余騎二隊に後備田

大熊備前守飯富海津左京亮館久比浦下野守
清正小野澤太郎兵衛府備後守今川右馬亮
巫利中澤下野守志浦三郎等二千余騎
凡そ二百余の前士雅林の左右に列り
を総合五千余人併せて惣軍一万五千余
に及へり武田信玄是を見て二万余
を引て川中島に出て海津の城に入る
八月二十五日の夜信玄旗本に籌策を
施し戸神山を越て出せ斜ね
保科弾正海津を後にて八千余を接

けり密に海津の城より其地に向しむ
其陣ハ曽根ハ栗田治部清野常陸介
布施大和守河田伊豫守市川和泉守等
合せて十二隊なり猶又密に筑摩川
を渉り越させの道ぐべき道筋に伏兵を
設けいバ矢炮の精兵を撰て緩さしめ
かくも念じて筑广の川原に分ち渉らせ
つゝ伏兵を施し行く給ひ縦に横を
む其間ハ高坂弾正昌信後理
が徒二千計二隊に小山田備中小幡

尾張守等続く芦田下野守坂本が徒之を統
凡二千計三隊に武田刑部少輔信賢小
笠原若狭守長坂釣閑諸角豊後守等
等後一条六郎が徒役後の勇士二千余人
渡に従ふ江の寄兵の勇士又百計
甲府の惣軍一万余人及一里令法厳重
まして河伍を乱さん恐く川中島に移
互に謹て是を守くして先陣等に
て曰くかれ割より海津の城中と
視るに兵糧の煙り移く立ち空て又物

吾まゝくその虚虚なり是吾が陣営と於らくハ思ふらんと急ぎ諸隊に号令を施し其行列を飛ぶ川とこそ渡り陣を移さんとて甲州の斥候に遇ひ申す兵凡二十余騎ここをと駈来らく迎まて足に旅く越列の惣軍難なく川中島に移る事を得たり遥代の術計機智こゝを作ぞす淀よ岸同じの論なりんや抑くゝ其信玄の一点よ及んで越兵の先鋒ハ千余騎を

激し励まして鏖の一戦に甲州の先陣を打破ら甲軍大よ周章し屡拒ぐ戦ひといへとも遂に打負して敗を作玄は恐怖して手回を立らせ先陣の諸隊を励し頻よ下知を傳く八甲陣の魁ねる坂戸田小幡が徒兄よ力を協て返し合せくお軍八代附武田刑部浦所領を始めとして小笠原若枝が板垣讃岐守一条六郎飯富兵部段理が徒これ野二千斗返し合せく遅戦す

両軍互に先のごとくけづり追つ返しつ攻戦ふ越将の兵ハ次第にうちかへん兵五丁計引退く甲陽の兵是を見て気を勝に乗じて追かけ諸所に戦ひあまた兵多り村上家の侍より此ゑ?にて井上清政須田満親高梨清秀芋川正利吉浦清正等二千余騎を以て甲陽の中軍に当る甲陽の魁将板垣信方飯富兵部が徒こと戦ふ事時を移すり此時越将の魁

将柿崎景家逸騎数多を率いて横合に走り懸りはげしく渾戦す是に於て甲陽の軍忽ち破れ士卒戦死するもの数を知らず越兵ハ気を得て追撃く是を得るもの去勝し此時に当りて宇佐美定行兼[illegible]二千計騎にて回将して甲陽の後軍に突戦ふ甲陽の魁将[illegible]戦ふてこれへともに軍大に破れて役佐る魁将板垣信方小笠原若狭守一條六郎[illegible]

越後山本勘介入道神庫源五郎海野月
刑部が徒遂に戦死せし合戦の最中
寅の下刻に及んで妻神山にをし寄
する所の甲陽の兵八千余旗鼓を鳴して
山下よりをしよせ越兵のひきさりし空営
を徒らにうちかこみさも厳重に陣所を張
る所に然し川中島の方にあたりて
鉄炮の音鳴渡りおびたゞしく
黒煙り立のぼりて天を覆ひ雲井をとゞろ
かすほどなれば波海野常陸が徒

をいや遅れしと計らるゝ如くなん馬をはやめ
して川中島に馳せ向ひ早速に力を
得くまさ悉く合戦に及べしと平井
半付に及びつゝ敵のうしろに越兵の兵
利にかへりして攻立す甲陽の兵ます
〳〵加つて二る斗り続ひ来て混戦せし越
列の先陣新発田長敏が兵をはじめ
頻りに士卒を励し奮戦ひ其の
時すでにをりなり村上家の勇将井上
清政高梨政頼本庄浦清正等

越兵よお加り忽ち甲陽の軍を打破
て逃よ士卒をまとひ越兵と相俟よ
犀川のほかるよ引退く甲陽の兵まさ
くこまりく戦んとし逆従是をとらく
退くもの々ますますして惣軍一度よ返し
合を競ひ戦く本陣をせかりをを取る
こと多し世よ云伝ふる逆従の東退
しと云是の甲陽の旗塚是よ鬪なる
ことふいひたるよ役績しての魁将
まる布施大和守川田伊賀守が討死せ付

遂よ戦死もも越列の兵猪よ奮りて急なと
甲陽の魁将栗田淡路根津山城が徒
を勝一千斗馬を荒して地まり衝
よとのまゝ々味方を相扶け越兵と
漂く両軍互よ動乱し旌旗東西よ靡
け死することの数をしらしく付越列
の役抜かる古来の魁将宇佐美定行
本庄美作守兵衛ら競ひそんで相戦ふ鉄炮
下野守村後因尾張守中条越前守竹俣
筑後守本庄弥次郎庵原源次郎柏崎

亦七郎も又宮浅に池加つて右より甲軍を
打立る信玄遂に敗績せり是に於て
越列の老臣等謙信を諫めて村上羽林
と倶に軍を善光寺に移して翌日
二十六日辰の上剋に及んで川中島を見
渡さんと甲陽の大軍十五段に備へを設け
其の魁将高坂弾正が徒只騎一千斗
請ひ来て犀川を渡らんとす謙信大に
悦て村上羽林と倶に進みて川中島へ
出り信玄と戦ふ事総て七度と云り

あるひは村上羽林も謙信と共に戦ひして越列
の士二千余騎犀川の辺に相加はる此時謙信
より長尾但馬守等に授くる所の書簡あり此
文に曰
急度申入候一昨廿五日於家中揃軍一
万余を率犀川を夜渡甲武田本陣に
押迫候処及一戦候武田四段小佐候
追撃一条六郎板垣駿河守小笠原
若狭守諸角豊後守初鹿源五郎輪郡凡
織部山本勘助以下七百余討死大利

以後武田先組之鏡ニ而　雁上山より
出り仕無之敵勢も人数をまし候ハゝ
と越中之中以後廿六日巳刻前今後向
武田と彼日七度之合戦遂不及勝
負今日両軍相引ニ付之紫波越庇
二千余川之渡ニ及金村之花清兵衛
源五郎椿原中之比日之無十分ニ
条可之島之相守依兵後河島守
可申候謹言

三月廿七日　　謙信　華押

長尾但馬守殿
横瀬上野介殿
中條新六郎殿

越中へ入之処同月廿五日夜渡邊飛騨守
川攻敗武田方陣之割ニ出合百人余
勝之後一番合戦百余討取一条六郎
候云段小幡依感状之翌日
事ニ合戦候之七百余之無合定候
無之押破候之軍場骸骨所

若又ニ此歎ヲ栖存ル者有之候ハヾ可行僕
右為村上殿御加勢也

弘治二年卯月十六日　景虎　花押

宇佐美駿河守殿

長尾景虎村上羽林を救んとて
武田信玄と川中島ニ戦ふ
弘治二年の秋八月長尾景虎村上羽林
相共ニ一万五千余を帥ゐて川中島ニ

か後を討んとて村上羽林の援塚ハ犀川
を後にして翌月二討ちに備を設くこと
是ハ塚をる謀将甘粕近江守を云所
清波須田大炊介親満第二手条二陣ニ
海津右京亮維久清野伊勢守常川
右衛門尉出浦下野守為一手之百余ニ続
て後七二百余、か浦之蔭今井示弾正中沢
下野林氏部ニ井原波湯沢因近石黒
須藤小野沢之郎云衆出浦二郎九衆門
上原求馬蔭井若者赤池治ア部小太郎

林源太郎君林宗女石川右京府源満宮内
小室平九郎等是を掌として次に十六騎
のもの士五十枚の長刀を携へ林の左右の軍
備に又勝頼が合せ子に及び始め越列の軍
勢は村上家にて先手として十千斗にして
霧ヶ峯の陣を設く武田信玄もまた二
万五千余の兵を率ひて海津の城を
發し川中島より相對し信越の勢
将等各主君のおほせを受け儀に及へ里
通信雅林語に法を以て計策を施し長

陳をかまへんがためにとて森をとり武田勢とつ
け既に山のごとく積み置せしは甲陽の
所候是をとりて信玄に告げ信玄是
を笑て曰く一両日を経ずして越列の陳
中に火事有べし若火の手必ず見れば
出に備へし法令に相背く
者は定科に行ふべしと厳重
の號令をかまへ則ち此日の晩景
に及んで越列の總軍兵を細々退
く覩よとなり甲陽の先陣高坂弾正

徒是とせるより謀を夜て馳せおんには
信玄莞尓と打笑ひ今日只今黄昏
に及んで謙信営を納るの理ハあらんや
や是家を謙信の陣営騒がしからんみだりに
手を出しこともなく主を制し信玄又
井楼に登り四方を眺望して謙信
備を近くまで押して麾下のかゝるに
引返さ予が云ふごとく是を静めて謙信
またさ返し合せ村上義清が旗下して信に
夷を襲んがなかんと今まゝ人は謙信が

陣中に火をかゝんと云もあへざるに
丑の刻に及んで越列の旗陣物音高く
きびしくかけ押備を設るしかるを
まさ近くなるといへとも忽ち火焼盛んにもし
へかゞり周章ふためく事なかれ
備に猶あら色かのくし明ける
胡営の様ますます騒ぎおえま二越
列の其道筋をとりけ列を二行に設け
て来くの旗を立て敵を待居さ
てその形勢いかにかく透間のあらざる

體ありこれを見て隊にハ長尾越前守政景なり
備後守松本大炊中条越前守を大将として
十余隊二陣ハ宇佐美駿河守柿崎和泉守
山本寺伊豫守色部小島弥太郎安田伯耆守
を隊将として十二隊次に通行雁行に
振り日の丸の大旗を風に飄し
或ハ小旗を立靡け袖まとひてこそ
勢凡一万余かくとのんで備居けるを
さて信玄ハや是を知りけんや自
制して兵をひかんとして禁し備甲越

の両将兵を用ふるの道ハ誠に凡庸の及ぶ
所にあらずこれを両陣共に感じけるとぞ
斯て廿五日の夜に及んて信玄頻
所に計策をなし其勢凡一万計山々
谷々の木陰に伏せをき越兵を誘ふ
とこえへしも謙信ましまし是を計知りて兵
をとめて是に動く信玄つくづく是
を観察し謙信の智計に頻りに感んしと
試に書ましまさハ恩の心のうちのもわりらんと
疑心をこせし兵を牧め海津の城に

かくて又是その翌日の未明に越列
の兵是をみてその未明に道より押して拒
み敵兵を遮りさまへを討る事に来騎
し甲軍の兵是も合せ防ぎ戦ふ事
ん甲州の士卒はまよまのぎさをあつめ
粉骨砕身して相戦ひ甲州越列の魁
将長尾政景家老朝倉将士卒を励し
甲陽の中軍に向ふる下平治七太橋に
宮沢三河雨宮治部左衛門先手
を支へて擾るとし多くして戦ひ

宮沢もまさ山のまよりに競ひ進んで何
兵の先陣に突入し蹂躙して其首を
被るもなにおかく何を遂に敗績し旅
方の川岸に到る村上家の魁将ともを
支へて馬にむちうち越兵に相かかり是
を追懸くそを討るとしまさに一兵を
甲州の兵陣より諸将の兵の感書を
その文に曰

阿波國文庫

甲越五戦記考正巻之四終

甲越五戦記考正巻之五

阿波國文庫
不忍文庫

上杉謙信上洛して将軍家に謁し準管領職を賜ふ

上杉謙信兵を率して関東所々の城を攻む且謙信自ら和田喜兵衛を誅ス

武田信玄兵を帥して川中嶋に来りて村上家の運場を放火し長沼の城を攻む

上杉謙信兵を帥して関東の諸城を抜く

上杉謙信大軍を帥して小田原の城を囲む

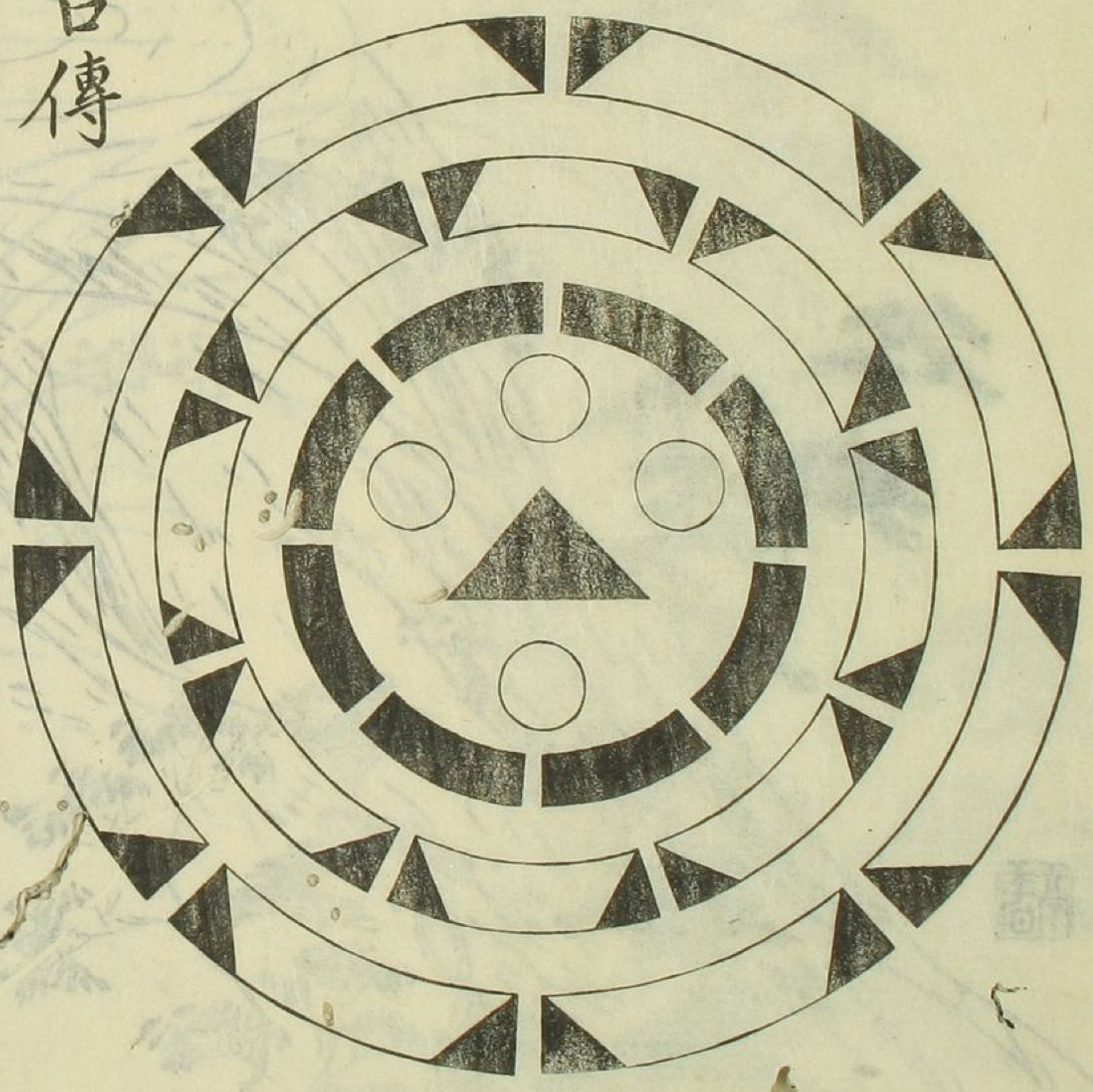
武田信玄兵を率し来りて海津の城に入

又此年陸奥の村上家の萬民等を害し
上杉謙信村上羽林父子大軍をおこして
妻女山に陣営を設け武田信玄と川中
島に戦ふ
足利大樹より上杉謙信に書を賜ふ
上杉謙信村上羽林父子兵を率して
武田信玄と川中島に相對し挑戦す
てふに兵を收む

妻女山上之圖

龍の丸備

有口傳



甲越戦記考正巻之五　出浦正左衛門源次令輯

上杉謙信上洛して将軍家に謁し準參令職を賜ふ

永禄二年夏四月上杉謙信上洛して将軍義輝公に謁し此時諱の一字を賜り輝虎と改む柳営又謙信をして管領職に任ぜらる謙信是を辞し朱柄の傘を許さる此時朝廷に謙信を召し網代の塗輿を賜ひまた菊桐の紋を勅許せらる上杉謙信公を率して関東下向の儀を

攻し旦謙信自ら和田孫三郎を誅し
永禄三年夏五月上杉謙信三一万余を帥
して関東に発向し上毛和田の城下に
至然し城将和田何某が一旅和田孫三郎
といふものの内應納来を叛くの事にゐて
謙信すくおもてを察し大に怨然して自
和田孫三郎を誅戮し此時を移さ久和田
の城を攬く此時謙信より太田兵衛入道三
楽より与へし書翰の文に日
此度和田城次越応夜諧ゐ処和田喜兵衛調

識合有遠剥城外へ立おさま迄只伺ふ所さ
仕方ゑ有る九日我等見討て仕孫三郎を訴
鶴川を乗越平分城外張を攻破し柳
原自身弱を取以存越応一命を捨持ゃ候
我等見旦候井弱を合救度し場玉応鶯
同以後節宇佐美駿河守鳴巣表へ相働
候得共武辛合手し厩橋之池京之に
武田小幡中合手後向し拝ん我等
和田城下迄陣よ以前ニ申者由致候

五月十日
謙信　華押

太田美濃入道反く

武田信玄を御ひて川中島に来り村上家の運場を放火し長沼の城を攻む
同年五月のころより川中島の豪士為村上羽林の代官と争論の末、ついに豪士数十人村上家を殺ひて信玄に属し又小形く海津の城将高坂弾正が徒五千余騎を率ひて為井和の西野に乱入村上家の運場を侵し羽林大に憤り西

井上左京父清正に命せられ彼逆徒為を誅し羽林まさその老臣清野伊勢守為井澤下野守小野澤吉郎兵衛又左衛門ら名を授け府中へ為坂弾正と戦りしむ此より運信の床上毛厩橋を告て援兵を乞ふ時村上家の老臣小野澤太郎兵衛尉祐後がことゝより越府の長尾にて府兵入る義文番あり御もし書、ついてその文ニ曰
謹而書公作らし不幸作所労海西信公之事故く移恐是遠る境目之其の大

彼逆意ゟ外別れ人元来途と云歟
以其れ威光云彼逆徒れ大小人過分に候
申事に彼為れ一礼分殺游足庵兄
然ハ第し以此等し題是頼れ披露ヶ返く
謹言

六月五日　　小野津太宰少弐尉
　　　　　　　　輔俊華押

本庄民部慶

上杉謙信公兵を帥して関東の諸城を援く

同年秋九月上杉謙信公一万余人を引率して関東え発向し平井小幡石和沼田の諸城を攻落し兵を收めて厩橋の城に至て軍を越年せらる

上杉謙信公大軍を帥して小田原の城をかこむ

永禄四年の春二月上杉謙信公十万余騎を率ひて厩橋の城を発し相州小田原へ趣き北条氏康が居城小田原をかこむ先鋒の将太田美濃守入道三楽八千騎二万余騎にて小磯

に降れハ謙信の家中大名の或ハ又
万余騎なる高麗寺(かうらいじ)山と云所に陣営(ぢんゑい)を設け相
君様山より夜をよく虎口(こぐ)入城して亦た
とちる越州の魁将(くわいしやう)等を囲(かこ)みてその城
門を打破り突入(とつにう)して堤池(つゝみのけ)の四門に戦ふ
謙信手に数名と計策(けいさく)を施し若を攻
然して謙信全て取り鶴岡(つるがをか)八幡宮に詣で
宮に首降れハ越州の衛士(ゑじ)何某を
成田下総守長安と争論(さうろん)のこと[illegible]長安
怒りて清士を殺ハ謙信此より召ちて

憤(いきどを)り成田長安を誅(ちう)せんとす是に於て長
安其怨(いかり)を蒙(かうむ)り病と称(しやう)して本住所より
しりぞく 按るに世に行ハるゝ所の甲陽の何に謙信怒て自 成田長安を打つといへども是謙信を誹謗する によりこのことに及へるも彼書の虚説 妄説にして取るにたらす
武田信玄を率し来つて海津(かいづ)の城
に入りて先ツ信濃の村上家の舊臣(きうしん)等を
害(がい)す
同年五月の事なるに村上家の舊臣高坂(こうさか)
安房が一族(ぞく)等密(ひそか)に羽林の館(やかた)へよさり一覚(かく)當
君(くん)に背く因て信玄海野氏入道殿なると

倶に従く武田晴信に降るを彼が首を斬て
此憤りなれども休兆事も再び公乃居を収のりん
事を計らしらへとも海氏入道に心謀略
果さんして遂に討死に及ひぬれハ信為孫
すら滞かりし日に程し肺肝をくだくと
云へとも信玄此事を知りつゝらん信
為をとをつくらふしを許さん云遁信と謀
を約せしもまだ進み兼ていた為信玄が陳
中に有く公の知せまでを請け信玄が
居城に密入しも時を失ひさバ彼が首を

擬んと欲するにいつれも事なく兵を動し要
害しとぞ云ぐ尾林太に收秘せまし汝が
貞太郎感しても折宗すハいかにとも寸
此事を遁信に正せるにあらす此よしを述
なるや信玄自ら兵を率して和利が
けの城を囲み遂に其城を拔さ高坂安房
が一族為を盡く誅し遁信の二人家の
過ハ粉骨せしなれどもつて師をおして
信玄法師が其をとられん事を歎きしハ
云を後せんと其の模様し頼あり

上杉謙信村上義清父子相伴ひ大軍を率して妻女山に陣営を設け武田信玄と川中島に戦ふ

同年八月の初めつかた上杉謙信村上義清父子相伴ひ兵一万五千余を率して川中島に趣き妻女山に陣営を設く此山のいたゞきより谷々にかゝりて涌出る水の程をそゝぎ流るゝのみなもとを堰とめつゝみ塘となし所々に柵を二重に構へ弓炮の軽卒綿く是を護らしむ其の陣営實に

堅固なりしとぞ武田信玄此事をきゝて急ぎ軍勢を催し宮子に来りて相対し其勢二万余人にて陣を張り信玄ハ海津の城に移る頃しも九月九日の夜信玄謀り知計を廻らし兵一万余をもつて謙信の陣をせし西条山に向はしむ信玄ハまた八千余人を率ひて窃に海津の城を発し川中島に進ミ越列の備へ留る其の陣を張りて謙信をうたんとするも謙信早く是を察し夜半に兵を催し

こゝに最深するとみて信玄讒臣を起
しこれを收めくまゐらるのまぬかれ
戸石の不刀に謀を隠し味方に変ぜしむる
をみんすゝめしまを返しまつく謀戦
せんと欲するの計略かくて今宵甲府の
魁将家を動その時刻ととゝのへ宵先鋒
戸の河原に佐兵を設け夾に後方に信
玄まさに近く風さの後を見りんと云所
桐信玄使臣沼笠二人相共によつて其便り
を書かりもとせんつゝく信玄が謀略を

斂察するに総軍二万を二手にわけ一手は
妻女山へとかけ夜中に及んて戦陣に出
くゝ来らんとし我は兵を利にわかれして遠く
信玄自ら謀を以て先鋒の後を渡りて
あらりてさし挟みんがために先かゝりて
つくによりを動きは彼が智計に倫りなん
とい時に越兵の伏兵数十人川中島
より池端く者く田中の方より海津
の城を発し川中島に稼がかり寄(ぞう)へき
設けぬ者れもも人数の多かいのみ定くし

と逆徒是を見て回宮綱延が云く宗
所中まで伝吾が云川中嶋に我城
路を免さんとするに能なし甘主我
形へ所なりといふ所村上服林とお後
して服林の云ふ千余斗を赤坂山と雲霧山
に法し武く彼云を設けます大炮の
精兵を撰く一二の柵を閉して防く撃
しく支かゞりを焼せ敵の来るを待さしむ
て越列の勢深征か山よりかり密にす
籠戸の川岸よりとも逆徒まで先陣する

魁将なる計策を施し夜半の刻より
りてこたかひ甲陽の兵信まさハ依云を
斬らすして凡十七人に及ぶて足にハおのく越
列の総軍弱く鞆戸の大河をさむひ渡り
法令を厳重にもちいし死人る皆枚を銜
中せ行衞を正しておまきをくと先一隊一
歩も違に来ふその下知斗よ
まくおとろくるゝ川中嶋に移まで霄の
程に天気爽にして銀漢浪て
果しく勝なりしが月の入お及んて

より暗雲沈々として霧雨濛く降かゝり
東西頻りに暗く指をさすも咫尺を辨ず
しに敵徒の軍勢皆油断して越方
の手に寄るをもしらざりしと云
へり斯く謙信ハ五塚の旗本を率ゐける
に魁将ハすなハち本庄越前守繁長
新発田尾張守長敦色部修理亮長実
鮎川摂津守下条薩摩守大川駿河守
等手勢合せて二千余人にて香坂の川
原をおしわたし海津と妻女山の間ニ

向ふ之陣よ備を設く謙信の先鋒よりあと
む先鋒ハ斎藤下野守朝信柿崎和泉守景家
長尾越前守政景二陣ハ千坂丹後守長重
九備ハ長尾遠江守藤景右備ハ本庄美作守
慶秀後ハ山吉玄蕃允親章相続く男
士三百餘謙信の左右ハ後陣ハ中条
梅坂何某云ハ宇佐美駿河守定行是に
右加はる所の勇士ハ甘糟近江守吉清
條太郎安田大貫五郎兵衛時角
等く直江大和守は後ハおし離れて備

を待く明れバ十日の卯の早天に及んで
越州の総軍鐘鼓をならし頻に激して
競ひかゝる甲州の先陣大に周章して
御やう戦ふべきともなく見方をうしなへども
ものゝ音凄く響ふて物色もさだかならず。の
かくして程なく九天雲霧晴わたりて西北えて
鏡晴りしかバ忽然として越兵の陣ハ
外に九に備くたし甲そその備へ
七八丁ばかり旌旗翩翻として鎗ぐくしく火
炮を発ちかゝる勢中へのりかゝりけるぞ

つくける甲州の兵尚も気を醒し御下知を
守りて斜に陣の越州の先陣柿崎
景家斎藤朝信等頻りに士卒を励し
競ひ戦ひ忽ち甲州の先陣を破る甲州の
魁将飯富兵部が徒兵も備に八百斗
返合せ防戦をして甲州勢を加へて
二手斗を添て入替り切なくより火花を
散して戦ひけれバ山県よりく海津
の敵徒を抑への魁将新発田因幡
侍野竜蔵等鼻を揃へしてかゝりけり

兵鋒二手に分れて押寄せ陣所に迫りけり
かゝりて挑み戦ふ甲州の兵士をも戦ひけれ
ども、いつもの軍勢にてはたらくを
利なくしては、ひに敗走に越兵、よく
兵氣をもつて是を後ろより撃しかば
甲州の組頭内藤修理今福浄閑が徒
頻りに下知してその勇兵を扶け、兵
を進めて防戦に越兵の陣より是をとりく
二陣に備へし長尾景房に仍て
長尾越前守小糸丹後守山吉源二郎等

鼓をならして士卒をすゝめ、隊を激
しているともはる強兵はまさ究竟の
騎士三百斗を左右に従へ、修雲が中軍に
突入し、忽ち甲軍を打破らんと究竟
甲州の旗隊大に崩れ、戦死するもの多
し。道修牒に棄し、退ひ敗くこそ斬
ること一千五百余級に及べり。海津
の城より妻女山に寄来る不の甲州の組将
高坂弾正、因海野が徒拐ども押来り
竪ヶに馳せ出らんとしぞ競ひかゝる時

志も川中嶋の方に當て黒煙の立るを見
又鉄炮の音を聞くにハ手に旗鼓乱れハ
村上家の魁将等柵際まで押出し寄る
鏡を發ち掛て其間戦ひ清甲州の魁将等
是に於て志たりに士卒を勵し變をせ
んじく隠戦ハ村上家の先鋒利ハのりハ
て山の半途より近く甲州の兵も氣よ
挫じ隊を激しく戦ひける村上羽林
此方後とまく諸隊を勧命し防戦
て甲州の先鋒を破る井上清政解政

次田筑前守維久ハ是よ力を得て強く
戦ひ首を斬ること五百余級甲軍忽ち敗
乱して死するもの多じ然るに後陣正
甘田おまが後に續九二千余騎を合せて
防戦ハ村上家の魁将清政敗れ甲軍
志じろぎて退崩さまとて甲軍ますます
破れんとせし時幼君村上源五義人ハ其の
老臣清野伊勢守清秀出浦下野守清正
等を從へたゞちに後軍の兵一千余を圍
将して坂濵正が横合に向ひかゞ戦ふ

としけるを移り岡場の兵まで戦ふと云
へとも不意を討れてくずれしかば
武田方田が徒兵軍つひに敗れて敗走に
村上家の鬼将猪に乗し返しけれとぞ
を斬ること三百余級是に於て甲州
の兵遂に敗績す此時にも浦三郎清久
若槻太郎清継二郎同撥二郎等切死す
従ふこと歩隊の功ありといふ羽林八郎
兼信等に計策を設し鬼兒の兵五百斗
を山かげに並えて押搾して鉄炮を備へ堅

重に足をたもちしむ於て武田太郎義信
ハ是猛二千余をおこし後に謹徒の後軍に
客戦は越列の鬼将中条梅俊が兵防に
戦ふこといつもは敗走に及へり此とき
穴山相模守は甘利宮が二千斗を追
将して武田義信が中軍に突入し
お戦て首を斬ること数多なりこ
義信が兵ついに敗績せり越兵の鬼将
等猶に奮して深くも戦ふ西に塞縁
甘糟清長等もまさに繁一千余を率し

て義信が近くあるを見て首を斬らんとせし
が謙信もまた信玄を追撃して
引返し原町に備を設け士卒を集め
て兵粮を命し給ひ暫く息を休めける
武田義信是を見てまさ窮竟の兵八
百斗撰びしかど夜に乗じて密り
来りて謙信の中営に突入れ是におゐて
謙信の軍大に騒ぎ既に破れんとして謙信
大に怒て自ら勇を奮て士卒に先だち
血戦すること数十合敵を斬ること十余人

越将の兵是に力を得て返し合せ義
信が兵を防ぐ安田柿崎本庄繁長
長尾藤景等もまた馳加りこれを夾
み撃ければ忽ち義信が軍をやぶる是よつて
て甲陽の軍つゐに敗績して謙
信諸将に計策をさづけし兵を收めて
犀川を後ろにしてかくこゝを取ち寄に諸陣を
明れば十一日卯の中刻の頃に及んで越
兵の老臣等謙信を諫めて軍を善光寺に
に移し且妻女山の陣営を焼払ふる村上

羽林もまた謙信と共に長沼の城に入
て士卒の労をいたはり高く賞し忠を
休めける謙信ハ諸軍を率ひて越府に居
申付謙信より諸将に賜ひし感書有
に文に曰

去十日於信州川中嶋与甲州賊逐一
戦之刻武田被官住以処信玄励諸
軍旅大塚五兵衛太兵衛虎之助与長
尾政景柿崎景家桃合戦諸軍巨之
之処汝于方軍勢一先之陰入

即附賞罰信玄令敗亡本戦功無
諸士以義就越後衆尽忠令
加増等者可励忠節之者如件
永禄四年九月十三日　謙信華押

渡辺越中守殿

去十日於信州川中嶋与武田晴信遂一
戦之刻粉骨抜群被成候
之機懸候励御徒被召騎者得
大利了達而早之忠節

謙信代々中にて不忘却して孫に嗜
右之行要存候也

永禄七年九月十三日謙信華押

松本大学殿

足利大樹より上杉謙信に書を賜ふ
永禄七年の夏五月大樹義輝公の使者
伊勢右京亮小越前守山ゆ来りて書を謙
信にあたへその旨を述て曰く輝虎氏康

晴信等寛東下に干戈を動し万民未た
苦しむのみ處々城邑を遂し天朝おほそを
憂へ玉ひ頻りに勅諚ありてすみやかに兵
を收め其国の平和を得て人民を撫すべし
と叡慮の旨大樹の命ありとて謙信謹
て是を聞く叡慮を驚かし奉るの旨を
深く恐怖するところ謙信もとより輝虎に
兵を起し好んで戦をなすにあらず今年
上意に違ふ事なし輝虎信例に兵を止めて
武田晴信と和睦ありし事は村上義清が為なり

そも／＼小田氏康と戦を合すれバまづ謙
虎が頼みとせしハ古管領憲政が為に起りよ
やむことを得ざれバ之氏康晴信両人の志
の云合に從ひ兵を收めて謙虎嘗好ん
で兵を起さんや此旨よろしく上杉家よ
達し給ふべしと諄々しく述られよ上使越府
に止まること二十日斗り種々の饗應にあづかりて
上使よくまさしいかなとの事をとゞめて立帰る
上杉謙信村上羽林父子兵を帥して武田
信玄と川中島に對し旦暮に給ひて互

に兵を救む
同七月十八日謙信越後より長尾政景ハ宇佐美駿河守定行
が謀に信州野尻の湖水に入て死せしかバ
時よのおしくまいハ謙信自ら兵を帥して
信州にきたり葛山に出張らる村上羽林
も亦爰にきたり謙信羽林ハ信州川中島
にいたる此とき武田信玄上しと聞て兵を
帥ひ爰に来りて相對し千曲川の南條
家に挑み戦ひて之より勝敗更にわかれん
附に甲陽の長臣等信玄を諫めて曰く

は村上義清に備ふらんに戦ふてこそ元十余
年を経るとも謙信の援兵(ゑんへい)はつゝがなく義清の
為にせんやとすれバ晴信も利を失ひ
或ハ智計(ちけい)に偏(かた)しいまでも今も必ずしも
此地民の苦しみを省(かへりみ)して功(こう)なき
に似たれバやなく謙信と講和(こうわ)を乞ひ飯山
川を境(さかひ)とし海津(かいづ)の城より東北の
北陸ハ村上羽林の所知(しよち)にまかせ是を運
場(ばき)の地(ち)として向後を境を争ふことなく
る為を絶(や)ちて又海津の城より飯山を合(がうとい)

を厳重(りんげん)に示して更く村上の境場(きやうさ)に入ず
是のごとくならば一紙の起請(きしやう)をもて是を謙
信義清に贈り是をもて和を收め又時(とき)の
争を止め後の謀の害を先ぐらさともあるべし
武田に於て勝のますく志(ちうりやく)を行(おこな)ふ是
にまかんやと思ふる慮(おもんぱかり)を運(めぐ)らさまほしと存る
でしといふをも聞くて深(ふか)く感(かん)じけるとぞ
信玄實にもとやさひりん然ハ運場(きやうさき)を和
定(さだむ)る此折(せつ)晴ハ明(あけ)の一騎(き)うちの備(せうぞひ)を従(しさが)ひて
先(まづ)謙信へ使をたてゝしとひのうて安馬(あんま)

義六は謙信命ぜらるゝを承りたまはりて上杉
家の陣よりも近江大和る寒澤までつゞく
と承りければ義六馬より飛おりて一紙の
盟書を差出し申しけるは信玄の言葉をのべ
て曰く先殿村上義清が為に忠をおもひ今
に至るまで十二年信玄家に敵対し戦
をなせしことじも勝頼互に変する事を思ひ
此是諸虎が手にて他より今日後ち垂場
を分ち云を收めて更の安からんとを欲
ば明日一手に勇士をもつて一騎討の勝負

に従りん貴殿意趣いかにして運信玄か
を以て兵を引て甲州老の中に参玉極
是よりも明日諸士をおさへ一騎討いかがあれ
と言葉を返して文を差出けるが
謙信是を見て笑く明日八十一日午の刻に
及んで甲陣の陣より何のかけ六尺餘
りの勇士白月毛の馬に打乗り宇治物のごとき
いやなる高声に名乗て曰く我は甲斐武田
家の者安馬義六と言へるものなり宇寡君
の命によりて今日此所に来向へる也越後

の勇士哉とさとりんとのいつぎ勝負せんと
傍吞しけるら形勢をみすまして
ありけるよ上杉家の陣頭より一騎すゝみ
しかるに士のまた見へぬ所のたけ高き人は
誰なら小笠原とも聞へぬかしも続ける
氣なく馬をとゞめて自呼んで曰卑怯
景發下野守胡信がその弟長谷川
あめる者蓑連といふ者なりいざや一勝負
仕らんと一礼をなしければ蓑連
無双の勇士なれば荒六いさむともせて

馬かけよせて切てかゝる荒六ひらさた
らしとのまゝ抜参なるやいなやとかひく
てきめつしと切りくまず蓑連もとうけ
流し馬をかけよせかけまじし双方秘術
自在をつくしきのさを割て挑み戦ふ
こと凡まは十合に及へともまは勝負へ權虎
の勢ひなりとしかつ見えければ君の
こゝよ在て一命は惜むまじ見ては君公の
大恩君恩此時抜きれしていつの時を
ら期をへさしぬを麾旗よりも帰れ

て一呼一吸をとゞむるにおよべバ互に組んと
こころひを累ぬれバ双方太刀を抛て馬と馬とを
乗違へもんずしくむずと引組しか
馬上のたゝかひ落るりけるが甚六かまはず
しけや甚連を組伏しすぐに首を取
んとせし甲州勢おほぜいをみてすゝむや味方
の旗をかし動揺しくるを見て甚連
如何しけるか甚六を衆をうち囲しそ
を打落して太刀をぬきつゝ見ねさ主よりも
甲州にて英雄と呼れたる安馬甚六が

首を討取りとて高声に呼はりけれバ杉村が
の諸軍勢天晴勇く変化のかたと一同
ゑを発し旗を打てかまひを声すると
ありしの長六か首をとりけり甲州勢是をきゝて
手勢凡二百余計讐を並へて木戸口まで
乗りかけ候ひ余すなよ備る自ら是を制し
てあそをとらえを動さじ備え手きに強
て甚六が組ちまち討取る如く味方の微
運と卿くし勇ら振舞あるのよいか遠
ゞくとまゝこ杉家の瑕瑾ならんとて翌日十二日

云を破りて甲府に至る也是より漸く通路
羽林亦供よ云を長沼の城に入れ是より
越後へ通路のなく人馬の足を休ゆる事
通路羽林深く志を得より計策を施し
云を破りて越列に至ることより尓来
海津の城云ふるも境を侵す事をなさ
れど偏に長谷川与兵衛秀連が戦功
によるなり村上羽林も秀連を召その
功を称せられ太刀一腰駿馬一疋を授け
らる此時村上羽林意にうる命さる也

川中嶋四郡の縣場に守兵を置き堅固に
是を護らしむ是より後佐久小縣埴科
の三郡ハ遂に信玄が押領の地となれり
この後謙信大軍を帥ゐて関東に振ふ
其到る所畏れ靡かずといふ事なし猛虎威を振るに
等し北條氏康もおそれて遂に
を子我質とし和睦に及ぶ甚だ常陸の
佐竹安房の里見會津の蘆名皆兄弟の
義を結ぶ下野の佐野下総の千葉等ニ一族
以下の人々も又悉く幕下となり謙信の旌旗

西に向へハ織田氏の軍勢これを恐るゝこと雀の鷹鳥にあへるかごとし向ふところ靡かすといふことなし又至る所みな其威に服し既に能登の国ハ草の風に偃すがごとく加賀ハ城をあけ去り北陸越前も大半謙信に屬して織田氏を御すべく謙信固より天下に威武振ふの勢形じ其威自然に發しぬれハこれに畏れさるハなかりしと也唯惜むべし天この人に年を奪て其意を得せしめ四十九歳にして逝く嗚呼痛ましいかな

甲越五戦記考正巻之五終

阿波國文庫